
魔王と呼ばれていた少女（？）

GARU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と呼ばれていた少女（？）

【Nコード】

N4074F

【作者名】

GARU

【あらすじ】

事の発端は何だったのだろうか。アイツとであつた事？関わった事？それとも巻き込まれたことか？何はともあれ毎度のごとく巻き込まれた騒動。しかも今回はこれまで以上に洒落にならなくて…。神様、本気でもういい加減にシテクダサイヨ（涙

第0話：プロローグ

（ごめんなさいでしたっ！！）

今更の様な気もしないでもない自己紹介の後、事態の顛末を訊ねて返ってきた言葉はソレだった。

なんと言つか、行き成り過ぎて訳が分からない。

それはまあなんとなく予測はつくがどちらかと言えば目の前のこの少女も被害者には変わりない筈なのだ。

まったく無関係だった自分を巻き込んでしまったが故にと考えればまあ多少は理解できるか。

もっともこいつはともかく俺としてはまあいつものことの一言で済まされるが。

……変だななんでだか泣けてくるよ。

込みあがってくる感情を何とか押し隠し、気にするなと意思を伝える。

（でも……やっぱり私のせいだから。失敗しちゃったせいだから……）

効果は全然。

とうとう涙まで浮かべだす始末。

（あぁっ もういいからソレはもういいから。何がどうなってるか聞かせてくれな。なっなっ）

もうこれ以上はと慌てて話題転換。

と言うか本命の話題に強引にでも引き戻す。

（ぐすっごめんなさい私のせいでこんな事にしてしちゃって…でもこれぐらいしか方法が思いつかなくて…）

（だーがーらっ泣かないっ責めないっ怒らないからっ。とにかく俺とお前に何があったか答えてプリーズ！！！！）

それでもなお際限なく落ち込んでいく少女に力押しでもって言葉をぶつける。

場合によっては逆効果だが、それ以前にこのままほっといたら悪化しかないんだから仕方ない。

（グスッうん、ちゃんとお話ししないと…私はともかくジージはこれからずっとの事だし）

何とか持ち直してくれたことでホッとしたのもつかの間、なにやら嫌な言葉を聞いた気がした。

（あ…あの…フィーさん…イマナンティイマシタカ？）

（あっえっと、だから…ずっとそのままだっ）

律儀にもう一度返してくれた言葉はやっぱり聞き違いではなくて。

（あの…それってこのまま一生指一本動かせないままという事なの
でしょうか…）

あまりの宣告に目の前の全てが真っ黒になる。

指一本所か五感すら正常でない現状が一生もの。

どんな地獄だよ。

それはもう本気の叫び。

（あっうん体の方は明日にでも多分何とかなると…思う。大丈夫、
ちゃんと元の身体と同じように動かせますっうんぜんぜん問題なん
て無いから）

絶望直前の心はそんな慌てたような言葉に救われた。

（ホントだな、ウソじゃないよな、聞き違いでもないよな）

（うっうん本当っウソじゃないよー。ちゃんと主導権は全部あげた
から。全部ジージの身体だよ）

（はぁ…よかった…たく脅かすなよな）

心底ホッとしたと全身の強張りを抜く。

（で、結局のところ何が一生モノなんだ？）

そして気になる部分を軽く訪ねかける。

結局の所俺自身の問題と言えば全身が全く動かせない事ぐらいで、ソレさい解決の保障を貰えてればなんとでも出来そうな自信はある。

これでも散々騒動とトラブルには巻き込まれてきたんだ。

耐性は人一倍どころじゃないだろう。

ソレはソレで哀しいが。

(えっと…その……その身体が…です)

(…は?)

そして返ってきた答えはまた訳の分からないモノ。

(そりや身体が一生ものだったのは改めて言われんでもわかるが…んな事わざわざ言わなくても当たり前前の事だろうが)

呆れ半分に返す最中、ふとこいつが特殊な種族であることを思い出す。

(そついやあそうか、フィーたちの種族だとそうでもないのか?)

(えっと…うん、そう。だから私は全然問題ないというか、むしろ早過ぎたから丁度良かったという感じなんだけど)

どこか恥ずかしげに頬を赤らめつつ。

(でもジージはそうじゃないから…元の身体は私のせいで無くなっ

ちゃったし、魂は何か大丈夫だったけど…身体、私のしかなかったし…このままだと死んじやうか幽霊になっちゃうかしそだったから…)

(ちょっとマテ)

なにやら延々と話し続けようとしているフィーの言葉を強引にとめる。

俺の経験と言うか本能と言うか、ともかく根本的な部分で聞き逃してはマズイと警笛が鳴っているのだ。

(ん？ジージどうしたの？)

(一つ確認したい)

(…うん)

(俺の身体がどうなったって？)

(えっと…その…ごめんなさい。ちょっと火力を間違えちゃって…)

(……………)

(……………ごめんなさい。えっとその…私が灰にしちゃいました)

物凄い勢いで頭を下げられる。

(…………でだ、今俺はどうなってる？ちゃんと身体は在って、生きているんだよな)

(あっうん、それは大丈夫。ちゃんと在るから生きてるから)

(…………じゃあ今の俺の身体は？)

(うんっ私のをあげたの)

……………ダカラチヨットマテ。

第1話・始まりはココから（前書き）

主人公にとっては日常（？）

第1話：始まりはココから

「…まったく最近はどうやく落ち着いてきてたと思ったのによっ」

後方から聞こえてくる怒声を引連れ、幅の狭い裏道をひた走る。

見失われない程度の速度。

右へ左へと、包囲陣営を尽く巻き込める様にして。

それなりの人数に囲まれているのには気配と視線で始めから判っていた事だった。

なにせどいつもこいつもたいした技量も持たない、勢いと感情任せなチンピラばかり。

撒けないなんて事は無い。

蹴散らしていくのもたいした手間でない。

「待てやコラー」

「逃げんじゃねーぞ腰抜けー」

不愉快極まりない罵声を飛ばされる度に、衝動のままに暴れれば少しは気が晴れなくも無いかなーとは確かに思う。

後の面倒や厄介ことも1人残らず全滅させちまえばそう出てくる手も無くなるだろうとは思っ…というか思いたい。

常識的に考えれば確かにそうなのだが、そうでない自分の不運ぶりに少し遠い目になりかける。

そうここで終わればどれだけ楽か。

10数人程度のチンピラなどどれだけ過剰評価しても雑魚以外になりえない。

たとえバックにどこぞの大人物が居ようが問題にならない程度にはどうにかできる自信はあるのだ。

いざとなれば逃げることでって造作もない。

街1つ消すのに比べたら比べるのも馬鹿らしい程にお手軽な手段。

何のしがらみもない根無し草な俺だけ……ならばな。

軽く意識を抱きかかえているソレに向ける。

抱きかかえられ、首筋に顔を埋めたまま今尚スヤスヤと絶賛睡眠中なこの子へと。

（まっしかしこの子が眠りこけててくれるのだけでも多少は楽かつ）

裏道か何かから先回りでもしてきたであろう正面建物の二階から飛び掛ってきた馬鹿を勢いそのままに後方に放り投げて右脇に見える小道へと入り込む。

スピードは殺さず。

勢いは散らし。

眠り子をけっして起さぬ様に。

「このつちヨコマカと鬱陶しいっ」

「ソレはこっちの台詞だっ」

「起きちまうだろうがっ！」

…と心の中でだけの大絶叫。

「まったく、戦争が在ろうが無かろうが変わらねえなあ」

長く続いた戦争もようやく終わりを迎えてから2年の月日が流れた。

戦争の爪痕や混乱は消える様子はないが、それでも人と人との間に笑顔が少し多く見え始めだした頃合。

そんな活気と力強さを眺めながら、俺自身もそろそろ落ち着いてきたかな

…っと油断してたらもうコレだ。

しかもこんなタイミングで。

流石俺だと大笑いしたくなる。

もちろんヤケクソ気味なヤツでだ。

…多分虚しくなるだけだから本当にやりはしないが。

右へ左への激しい動きにくわえ、普通目の覚めそうな金属同士の奏でる剣戟の音まであっても今だ起きる気配ゼロな少女をさらにしっかりと抱きかかえる。

「たく迷子の面倒だけで十分手一杯だったのに…よっ」

それが問題を大事へと発展させたくない理由。

逃げの一手を早々に除外しなければならなかった理由でもある。

怒気交じりの呟きと共に、
またも上空から降ってきた敵を…急静
止&バックステップで回避。

着地状態のソイツを鬱憤払しの勢い込めて一刀の元に斬り捨てる。

苛立ちをぶつける相手はまだまだ出てくる。

だがそいつら自体が苛立ちの元凶だというから斬っても斬っても収まらない。

さらに相手が余りに雑魚過ぎて、手応えが無さ過ぎて鬱憤晴らしにもなりもしない。

「全然これっぽっちも望んじゃねーのに。次から次へとあーっっっ」

ああもちろん判ってるさつ。

原因は俺だったことぐらい。

世間一般からの視線も、評価も。

狙われてる十二分に自覚はある。

でも下手な火種から積極的に逃げてた。

にもかかわらず…

合いも変わらず騒動は起こるし。

騒乱には巻き込まれる。

運命とか神様ってのはこの世で一番嫌いな言葉だよ。

ああそうさ全部悪いのは俺だよ。

狙われているのは俺で。

この子はただそれに巻き込まれただけ。

ああそうだ。

いつもそうだ。

俺は運が無い。

あつても悪運。

まともなソレじゃねえ。

それはもうホント極端なぐらい。

気まぐれに人助けでもしようものなら何故か助けた方が悪者だったり。

野宿の最中に襲われ、危うく食い殺されそうになりながらも返り討ちにした野獣が実はそこいらの国では聖獣と崇められている生き物だったりだとか。

…実は気付かなかっただけで、その森事態入ることすら禁忌とされているなんて後から言われても。柵も囲いも無いのに、んなこと判るかー！！

さらには子供と遊んでただけで人攫い扱いされるは。

行きがかり上泥棒を撃退し、盗品を取り戻してみれば逆に泥棒だと衛兵に追いかけられるは。

拳げ句の果てには、何時も何時も因縁つけてくる小娘が実は勇者様だ救世主様だと騒がれている英雄様の一人だったりしてる訳で…

ったくなんだよ魔王ジーニアスって。

しかもソレを面白がる連中が周りにはウジャウジャと…

あーもうつなんか思い出してただけで素で腹が立ってきた。

「死ね―――」

「あ―――っうっとうしいっ」

懲りることなく正面から突っ込んでくる新たな雑魚を一人二人と。

不意打ちでも狙っていたか後ろからの三人目と左右からの四人目五人目。

切り伏せ、貫き、氷漬けにして一気に走り抜ける。

「無駄だ無駄だとわかんねーのかよっバカがつ」

聞く者のいない愚痴を吐いては捨てる。

本当に…

今も昔も…

争いが在ろうが無かるうが…

こついった手合いの馬鹿は尽きることが無い。

路地を抜け、少し空けた広場のような場所へと飛び出す。

「つたくなんなんだよお前らはよ」

あまりに見慣れた状況。

「ホント毎度毎度：お約束過ぎる展開だなー」

なんとなしに予感はしていたが本当になるとは感心してしまう。

「クスクスクス。オニゴツコもココまでという事ですよ、魔剣士殿」

そんなセリフと共に出てきた一人の男。

見た目印象は似非インテリ。

両脇には辺境辺りで熊か何かと取っ組み合いでもしてた方が似合
いそうな筋肉ダルマを従えてのご登場である。

「うわあ〜」

思わずして言葉が漏れる。

なんと言つか、ココまで来ると一種の喜劇か何かでしかお目にか
かれないチョイスだ。

「貴方も不運な方ですね。本来なら何の関係も無い筈のお人がこん
な事に巻き込まれることとなってしまつて。心より同情させていた
できますよ」

そんな俺の胸の内など知りもしないであろう三下は、何がそんな
に可笑しいのか笑いをかみ殺すような…見下した様な笑みでもつて
言葉を紡ぎ始める。

「しかし不運と言うのはなにも貴方だけではありません。私共もそ
う。貴方の様なお強い方が現れなければ、事はそれほど荒立てる必

要も無く、ましてや貴重な部下たちの命をこうも多くいたずらに失う事ありませんでしたのでしょうか
ら」

不運と言いつつもただ言葉だけな感じ、部下を駒としか見ていないのが見え見えの物言い。

「そう、そうです私共も決して事を荒立てたかった訳ではないのです。貴方が素直にその子供を渡して頂けていれば貴方だけでなくココまでに消えていった私共の部下の命全てが無駄に消えることはありませんでしたでしょうに。そう考えると被害者はむしろ私共かもしれませんね。貴方が無闇矢鱈と首を突っ込んできさえしなければ失うものなど、誰も、何一つとしてなかったのでしょうか」

しかも言って早々に突拍子も無い屁理屈で自分を被害者扱いが。

首を突っ込むも何も問答無用で襲ってきたのはあんたらなんだけどな。

とりあえずこの馬鹿の戯言がどこまで続くか、今の所は聞いてみたくなつた。

「無論私とて血も涙も無い鬼ではありません。ましてやそれ以上にただ降り掛かる火の粉を払うだけしか能の無い愚者でもありません。どうです、私の元にその子と共に来る気はありませんか？もちろん報酬は破格で用意させていただきます」

ますよ。まっ最も失った部下たちの埋め合わせをしていたいた後に…とはなりますけどね。私としても心苦しいですが、多くの部下たちを納得させる措置として捉えていただきたい」

部下思いと思われたのか、しかしそのイヤらしい笑みを差し引くと説得力は皆無。

一瞬ワザとか？などとも思いかけた程の胡散臭さ。

「どうです？決して悪い話ではないと思いますが。貴方ほどの腕、ココで消してしまうのはあまりに惜しい、貴方もけっして自殺志願者と言う訳ではないのでしょうか？私の元でその腕を振るっていただけるのでしたらすぐにも私の右腕となれるだけのものは持っていると見ますがどうでしょう？異存などありませんよね」

もはや選択肢などありはしない、とでも言いたげな口調。

というかまんまそんな感じの口振り。

しかし、兎にも角にも実に良く喋る口だ。

よく舌が疲れないものだと思心すら出来る。

内容はともかく…だが。

しかしまあこういうヤツが居るからの言葉なんだろうな、アレは。

「弱い犬ほど良く吼える……か…」

なんとも微妙な言葉だ。

対象となっているのがこんなだと思つと特に。

第2話・真に巻き込まれし者は（前書き）

チンピラ のファイバータイム

第2話：真に巻き込まれし者は

十分に喋って満足したのかその男は嫌らしい笑みをそのままに、ただその目が俺に答えを促してきてやがる様子だ。

どうやら先程の俺の言葉は聞こえていなかったらしい。

別に聞かせたかった訳でもないからどうでも良いが。

この手の連中の中には異常なまでに自身への侮蔑に敏感なのも居るから。

もつとも、目の前の馬鹿に関しては…

自分の口上に酔い、悦に浸っているだけの可能性もあるだろうが。

と言うか、何気に一番ありえそうで笑える。

何と言うか道化以上に道化染みている。

「それではお返事を聞かせていただきましょうか？」

いきなりもう待ち切れなくなったのか。

むしろ即答してくるとでも期待してたからか。

一向に何も言わない俺に対して、言葉でもって直接返事を求めてきやがった。

最もこいつの中じゃ、承諾以外の答えは思い浮かびもしていないんだろうけどな。

即答で拒絶してやっても良かったが、ココは一つちょっと気になることがあった。

「一つ…聞いても良いか？」

「ええ、私に答えられるものでしたら」

反応が返ってきた事に余裕でも感じたか、大袈裟な物言いと仕草でもっての見下し。

何故かこいつの中では好感触な問らしい。

「あんた等の本来の狙いはこの子なのか？俺じゃなくて」

何故かは判らないが聞いていた言葉の端々に…と言うか明らかに全ての話しの渦中に居たのは俺じゃなくてフィーの方だ。

「ええそうですが？…まさか貴方そんな事すらも知らずに…クククツアハハそれはそれは、本当に運が無い。同情しますよ、ええ本当に、心からね」

本当に嫌みったらしく晒う。

ここまで露骨だとワザとやっているんじゃないかと本気で考えるぞ。

と言うかむしろ才能と言った方がしっくりくるかもしれん。

（羨ましさなど欠片も感じられない才能だろうけどな）

それでも胸の内の引っかかりは取れた。

なんてことは無い。

つまりはあれだ、けっきょくただ単につまらんいざこざに巻き込まれただけと。

当人らには悪いがこの程度、俺にしてみればぬるすぎてトラブルとも言えねえ。

「さて、貴方の質問にも答えてあげました訳ですし。そろそろ貴方のお返事を聞かせていただきましょうか」

ニヤニヤと笑う小物。

「まあ聞くまでもない事かもしれませんが、こういう事は言葉ではつきり示しておいた方が後々トラブルも少ないでしょうしね」

自分の頭の中で展開している自己中な妄想が絶対とでも思っているのか、なかなかにお目出度い頭の中だ。

「ああそうだな」

だからその言葉だけには同意してやる。

確かにはつきり言ってやらないとこの手の輩には通じないだろうし。

「答えはノーだ。わかつたらさっさと散りやがれ、目障り……ん？」
広域型の魔術で一氣に散らそうとした所で感じた微妙な違和感。
発動することなく消失した魔術式を確認するまでもなくその正体
に思考が行き着く。

（これはまた…随分と羽振りの良い）

少なくとも、普通街のゴロツキ連中が所持してられるものじゃない。

「ククク…どうしましたか？もしかして魔術でも使おうとしまして？クスクスクス無駄ですよ無駄、少なくともこの周囲一帯では一切の魔術行使は不可能ですから。クスクスクス残念でしたね」

見下すような、嘲る様な晒い。

本当に、ここまで人をム力つかせるのは正真正銘才能だろう。

「しかし貴方と違って私は運が良い。本来でしたらその娘子の暴走を抑止するために用意しておいた、いわば保険でしかなかった物が、まさかこの様な結果をもたらしてくれる事となるとは」

暴走？

抑止？

やはりなんと云うか、訳有りか。

もはや確認するまでもない。

しかしぶっちゃけた話事情なんて今はまあそれほど重要と
言うわけでもない。

確かに悪人っぽい連中が見た目通りに悪人で無いこともある。

状況次第では悪人こそが正しいときも確かにある。

だから事態の把握は俺にとっては何よりも優先させなければなら
ないはずのこと。

過去の…山のような経験の数々が俺にそんな考えを刻ませるくらい
には大量に在るのだ。

それはもう本当に悲しくなる程には。

とは言え、ココまで見下されていて笑って「ハイソウデスカ」な
どと言えるほどにお気楽な人間にはできていない。

なによりこの手のチンピラがまともな善人などとは到底思えない。

誇りや信念のある悪とも思えない。

言葉通りなただのチンピラ風情だろう。

それに…

あのム力つくニヤケ顔をひきつけさせるのは、ちょっとだけ胸が

スツとしそうだし。

理由としてはまあそこそこである程度は大丈夫だろう。

「さて、寛大な私ですから今一度聞いてあげましょう。どうです私の部下になりませんか？」

だから答えてやる。

今度は軽いおまけもつけてでなっ。

「嫌だ、断る、考えられねーよ」

誰が聞いたとしても判る明確な嘲りの言葉。

見下す視線に嘲笑の晒い。

向けられたそれらが予想外だったのか一瞬ポカンとした間抜け面を晒してくれた馬鹿は次の瞬間には顔中を真っ赤にさせて吼え凄んで来る。

しかしそこに威圧感はない。

ただメツキが剥がれただけで、こっけいですらあるピエロだ。

そんな道化の三文芝居を前にし、広げた両手に軽い集中を込める。

両の手に現れたるはそれぞれに別波形の魔力。

本来なら結界によって瞬時に霧散させられるのだろう。

が…現実にはそうはならなかった。

そうはさせなかった。

そうできるだけの技術と知識をもつてして。

そして…

その現実には、状況も忘れて目を開いた連中らの目の前で…

その二つを胸の前で思いっきり叩き付け合う。

結果。

巻き起こるは乱雑に絡まり巻き起こる魔力の旋風。

ただそれだけのコト。

人体、自然界への干渉所か、派生そのものを感知する事も普通には難しい微細な波紋。

最も、そんな大部分に属しない結果もまたある。

封魔結晶と分類されるソレにとってのソレとか…

こうして枷は砕かれた。

気付かぬ馬鹿にはこれ見よがしに魔術式を発動させて判らせてやる。

この程度の結界に意味などない事を。

「大方その部下とか言う錬金術師にでも作らせた物だったんだろうが…ハッ随分と脆かったな」

伝わってきた手応えからははつきりと粉微塵となったそれらの惨状が感じられた。

ココまで脆いと逆に本気を疑いたくなる様な呆気なさ。

「ばっばかなっ…そんな…なぜ…魔力は完全に封じてたはずだぞ」

「今言わなかったか？あんた等ご自慢の封魔結界はとつくに粉々だっ
つて」

「そんな…そんな馬鹿な、ありえない…」

想定外だったであろう事態に、余裕も嘲りも零れ落ちたか、狼狽を隠せもしてない引きつった本心が表情に滲み出している。

「まっ俺としてはこの程度の結界で何も出来なくなる方が、ありえないことなんだがな」

でなきやとつくの昔に墓の中だったの。

「んじゃまっ終わらせるか」

腕に纏わせていた術式を広域に開放。

ココまで来て、やっと現状に判断が追いつけたか、慌てて武器を構えだす有象無象。

とりあえず遅過ぎ。

そして終わりの一手を…

………シュンッ………

一瞬胸を突き抜けていく様な軽い衝撃。

不意の一撃。

感じたのはそれだけ…

そうだったそれだけの…

本当に呆気ないほど軽い………

……ソレは死神の鎌だった。

第3話・そして終わりのとき（前書き）

油断大敵

第3話：そして終わりのとき

「ぐっ…はっ…」

込み上がってくる何か。

痛みなどよりも先に悪寒が全身を駆け巡る。

「…クッ…何者だ」

何が起きたかなど考えるよりも先に直感で覚っている。

射撃。

それも長距離からの。

（くそっ気を緩めすぎてたか）

油断してた自分自身を真剣に叩き倒したくなる。

現状が現状だけにその必要すらないのがまたムカつく。

（2撃目は……無い…か？）

なんとか精神を研ぎ澄ませ、気配を探るが痕跡から見つからない。

遠退きそうになる意識をそれでも懸命に持ち堪える。

相手を補足出来ない以上どう出てくるかまるで判別出来ない。

油断は最早欠片とてない。

(どこだ……どこに……くそっ見つからない)

穩行か？

距離か？

なんにせよ今の一撃は完全にしてやられた。

索敵の精度がどこまで落ちているかは判らない。

しかし唯一つはつきりしている結論。

相手に出てきてもらわない限り今のままじゃ捌り殺しがオチ。

ソレがないとすると、警戒か確信か……か。

気配を補足されている可能性から俺の次手の警戒。

致命傷を確信しての最期の看取り。

(クッどうしようも……出来ない……か……)

どちらにせよ既に盤上はチェックメイト。

致命傷であることは間違いない。

治療の術も、全てを引っくり返せる様な反則技もココには無い。

「ハッははっでかした、でかしましたよ。ははっ余裕が一転完全に逆転しましたね」

それでも何かないかと思いを巡らしている所に、状況を、何一つ正確に理解していないであろう馬鹿の…場違いな叫びが耳に響く。

「ククッ…下手に余裕など見せるからこうなるんですよ。ククッハハハッ私共の仲間が目に見えるだけのソレと思っていたのですか？ククク愚か、本当に素敵なほどのお馬鹿さんだ」

饒舌に上機嫌に見当違いの言葉を吐き続けるチンピラ。

「ククク…どうです？どうします？今ならまだ間に合うかもしれないよ？さあ認めなさい私こそがお前の主人だと。そうすれば飼主の義務としてすぐにでも手当てをしてあげますよ」

馬鹿な小物とは判っていたが、よもやこの至近距離で傷の深さも認識できないとは。

「あうっ」

小さく悲鳴。

それは腕の中からずり落ちた少女が尻餅を着いた為。

「ジージ？」

まずい。

腕に力が入らない。

感覚が本格的に鈍り始めてる。

「んーん…あれ？ジージどうしたの？」

見上げてくるその少女に無理やり笑ってみせてやる。

「…ぐっ……じっジージ言っな」

どれだけ言っても直そうとしないその呼び名に苦笑交じりの抗議を。

…少し気が紛れた。

「ジージどうしたの？お腹痛いの？」

ギュッと握り締めるように押さえ続けている腹部を心配げな瞳が見ている。

漆黒の夜の闇が今は幸いか、滲み零れ続けている血には気付かれて無い。

「ジージっ…！」

くっ……とうとう足にまできたか。

ガクリと崩れ落ちるように膝を突いた俺に慌てたような少女の顔。

この子が狙われている理由は今だ判らない。

気にはなるが、それでもそこを突き詰める余裕は欠片もありはしない。

視界がぼやけ始める。

音が遠くなっていく。

流石にもう…終わりか。

覚悟は必要なかった。

碌な死に方はしないという事は、あんな日常を過ごしていればいやでも悟ってしまえる。

そして今その時が来たのだと…それだけの事。

それでも誰かを庇ってなんてのは少しヒーローぽくて良かったか？

直接的な原因は別でも状況は状況だし。

（ただ後を預けれる相手が居ないのが限りなく不安ではあるが…）

それでも今のままよりかは何百倍もマシだと思うから。

だから今はその一点のみを目指して。

「……………」

叫ぶ。

声無き言葉で。

魔力をこの身の内より一気に汲み上げる。

半ば暴走しかけているその手綱を必死に手繰り寄せる。

目の前の馬鹿どもをただ消し飛ばすだけなら必要ないであろう。

だが、んな事に自分の命一つは安過ぎる。

力任せなソレ全てを繋げ合わせ。

ただ望むべきソノ事象へと。

対象は目の前の少女へと意識を向けているその全ての存在。

効果範囲は今の俺の知覚範囲内の全て。

風属性、縁を伝いて伝達の先まで全ての網を巡らす。

洩れは…無いっ！

元よりそういう状況を打破するべく編み上げた術式。

（うまく生き延びるよ）

状況に思考が追いつけていないのか、目を大きく見開いたまま見上げてくる少女に。

唯一人、この場で生き残されるであろう少女に。

ただ思い願うはひとつだけ。

「じゃあな、フィー」

思いのほかともに発せられた言葉に僅かばかりの苦笑。

神様つてヤツもたまには粹な事をと。

まっ生涯最後のだからなのかもしれないがな。

出来ればそのままこの子を頼みたいところだが、そう都合の良い相手ではない事は誰よりも俺が知っている。

「ジージ？」

だから残された時間で出来る全てを。

もしかしたら無関係な誰かをも巻き込むかもしれない。

敵だけでなく少女の味方までも巻き込む可能性も捨てきれない。

しかし躊躇いはしなかった。

そんな時間も余裕もない。

ただ、少しでもこの少女を覆う障害を振り払うがために。

そして…

世界は凍りつく。

唯一人の少女を中心として。

唯一人その少女を除いて。

馬鹿も。

筋肉ダルマも。

その他大勢の雑魚どもも。

俺自身をも。

唯一人の例外も無く。

全ては氷像へと転じる。

対象を認識、思考、干渉せし全ての存在を対象とする連鎖術式。

本来なら呪いなどといった干渉系の術式の対抗術としてのソレだが、こういう使い方も出来る。

もっともこんな方法、味方が誰一人としていない状況下でしか使えない不良術式だが。

だが今はソレで十分。

こいつ等の狙いがこの少女なら狙っているというその認識が効果対象。

故に漏れは無い。

ただコイツを助けようと認識している自分自身も効果対象とされてしまうが。

まあすぐにも死ぬ身だしな。

だから問題ない。

…多分。

…うん、まあ大丈夫だろう。

そう思い込んでおこう。

後は知らん。

氷結した世界の中心でその全てを覆い尽くすほどの赤き光。

ソレが俺の見た最期の光景だった。

第4話：そして目覚めるとき（前書き）

注意：この作品はTSではありませんがその事で主人公が苦悩するのは当分先かも：なにせそれ以上に目に付く問題^{トラブル}がもう目の前にゴロゴロとですからw

第4話：そして目覚めるとき

「あーっジーニアス遅いよーもうあつそれでそれでねコレコレ、ホラココの特産でねーすっごく美味しいのおっ！！！」

そう無邪気にはしゃいで駆け寄ってきた能天氣の頭に思いっきり俺は拳骨を落としていた。

ソレは日常茶飯事なまでの家出騒動の何時もの終わり方。

「うっうっ式は間違ってない間違ってないのにどうして……」

これ以上無いと言いたくなる程に精密で正確な魔法式を組みながら何故か発動させれずに落ち込むソイツに呆れながら歩み寄る。

ソレはまだ俺が俺の魔法式をソイツに教え始めるよりも少し前の話。

「ちょっとアンタッ姉さまに一体何してんのよーっ」

問答無用でいきなりな飛び蹴りを何とか避け怒鳴り散らしていたのは…

最早数えるのも億劫なくらい毎度毎度のやり取り。

「おっジーニアス久しぶりだなっどうだチョット一戦、前は負けたが今度こそは俺が…」

「やれやれ何を騒いでいるんですかあなた達は。そんな事よりもジ

「ニアス、先程姫様から手紙が届いたと…」

「てめーっローレンっ！邪魔すんじゃねーよ」

暑苦しいバトルジャンキーと冷静沈着を絵に描いたような凸凹コンビ。

嫌いではなかったがこれ以上騒動に巻き込まないでくれというのが俺の正直な感想だったか。

あとそんなに気になっているなら自分でも手紙を出せと一言。

「お帰りなさいませジーニアス様。それで此度はどちらに？」

振り回されるだけ振り回されてようやく帰ってこれた所でそう微笑まれる。

何と云うか本当にソレは貴重な程に数少ない当時の癒しだった。

……

…

そんな何気ない会話、やり取りの数々。

賑やかしく騒がしく、平穏とはとても言えない日々だったが…それでも悪くない日常だった。

…世界が戦火の渦の渦中に在った中であつたとしても。

それ故にそんな日常は一時の夢の如く儚く…

「あははっ あんなのでも一応は父様だしね」

困った様な、そんな無理矢理な笑みはどうしようもなくコイツらしくなくて…

「まったくいつもいつも面倒ばかり…ジーニアス、ココは私がなんとしますから先に…」

憎まれ口を零しながらも立ち止まるその背を支え、護る事の出来ない自分が齒痒くて…

…確かに在った筈のその日常はその日あっさりと崩れ落ちた。

…夢。

そう…これはそんな日の夢。

確かにあった日々。

そう。

在った日々。

今でも…

未来でも…

可能性でもない。

確実に在ったと言う覆せない過去。

そんな日々の欠片が脳裏を駆け抜ける。

そんな夢と自覚できる夢。

そしてその中に居た自分。

夢はいつの間にか主観的視点から客観的なソレへと変わっていた。

なんとなくしに可笑しく感じられる。

夢とは本来夢と気付かむだろうに。

しかし現に今こうして俺は自身の過去を夢に見ている。

（ああ…そうか、これが…）

ふと思い浮かんだ単語。

しかしソレはあっさりと納得の形に納められる答え。

（……………走馬灯ってヤツなのかな）

自身に起きたソレに思い至り。

コレが世によく聞くアレだと理解した。

波乱万丈を絵に描いたような自身の人生。

それでも尚コレは初めての体験だな。

（まあ普通に考えれば何度も見る方が可笑しいんだろうけどよ）

そう苦笑気味の感傷に浸りながら、目の前の思い出に視線を向ける。

なんとなく…いつの間にか視線が気持ち遠くなっている様な気がした。

輪郭も少しぼやけ始めているか…

全体的に白みを帯び始めているか…？

そこまで意識した瞬間。

変化は目に見て判るほどに加速。

（そうか…もう最後か…）

白く染め上がる世界の中で…フィーの涙が映った。

ぼんやりと、目に映る見覚えの無い天井を眺める。

ふと始めにココがあの子なのかと思った。

しかし思ったと同時にそうではないと感じる。

理屈が如何こう、根拠がどうだと言う事ではなくとも、ただそう思った。

ソレはあまりに自然すぎて…

否定も疑いも無いままにストンと心の裡に嵌り込んでしまふ。

生きていると。

まだ死んではないと。

それは確信的な直感。

無論いぶかしむ心は在る。

時と共に理性的な部分がこの今と言う現状に納得のいく答えを求めている。

想い返される確かに在った過去という事実から来る結果に今が結びつかないから。

なぜ生きている？

確かに俺は死んだ筈なのに。

(……………助かったのか？)

たぶんそれが一番シンプルな答え。

何がどうなってかはまるで判らなくとも。

そうであることは覆されないであろう。

そう理解してしまえるからこそ困惑もまた大きい。

(なにが…どうなったんだ？)

自身が負った傷、アレは確実に致命傷となりうるソレだった。

自身で使ったあの術式もまた致命傷に至るレベルの威力を持っていたはずだ。

（なのにどうして…）

訳が分からないまま、それでも自身の身を確かめようとか、半ば無意識のままに手を目の前に掲げようとし、感じた違和感。

そして次は意識的に。

結果は変わらず、違和感の正体も知れた。

手が…腕が…指の一本すら動かせない。

正確には動いているという感覚が無いというべきか、見ることから出来ないため判断の難しい所か。

そうソレは手だけは無かったという事。

首も足にもその感覚が感じられない。

正直言えば今時分がどういった体勢なのかすらもまるで判らない実情。

パニック直前の思考の混乱。

それでも何とか踏み止まったのはトラブル慣れしている自身の経験故にか。

（とは言えソレも当たり前か）

そう強引にでも今の状態を受け入れる。

（まあ確かに…あれだけの事をしたんだから、この程度運が良い方なのかな）

元々死んでいて当たり前の場面だったのだ。

生きてただけで運が良かったのだとも取れる。

そうそうなのだ。

でも…本当にそうなのだろうか。

心に浮かぶ不安。

自分自身がどうなっているのか判らないが故に。

どう助かったのか、また助けられたのか判らないが故に。

判らないという疑問は疑惑へと。

暗く黒い感情。

自分は本当に生きいてるのだろうか。

ただそう思い込んでいるだけではないのだろうか。

もしかして自分はすでに…。

心に重く広がる恐怖。

耐え難いほどの不安。

本当の事が知りたかった。

何があったのか。

何が起きたのか。

今どうなっているのか。

どうしてこうなっているのか。

全部全部。

なんでもいいどんなことでも…。

心がこの重圧に潰されてしまう前に。

（あっジージ起きたっ）

「……………っ！！」

突然目の前に現れた満面の笑み。

ソレは本当にいきなりで。

飲まれかけていた思考が一瞬にして硬直、真っ白になる。

（よかったージージ全然起きないから、私また失敗しちゃったんじゃないかってすっごくドキドキだったんだからー）

大袈裟過ぎる程にダイナミックな動作で身振り手振り話し続ける少女。

その姿は、その顔は、間違い無く今回の一連の騒動の原因で。

（でもねでもねっ私絶対大丈夫だって思ってたんだよっ。魂も命も身体だって全然安定してて大丈夫だったからねっ。それでそれでねっジージの意識がちゃんと目覚めてくれたから。完璧な成功なのよかったよーー）

物凄い勢いで喋り捲ってきたあげくぎゅーっと抱きついて来た。

無論全身の感覚を感じられない現在の我が身。

どれ程の力で抱きつかれても何の感触も感じられない。

もっとも例え体がまともな状態だったとしても果たしてこの少女の抱擁を感じられたかはなはだ疑問だが。

そう思ったも束の間、ガバツといった感じでくっついたまま顔を上げる。

お互いの鼻がぶつかりそうな超至近距離。

（でもほんとーに良かったー。ねっねっ身体なんとも無い？変な感

じとかしない？痛いトコとかない？苦しいとか気持ち悪いとか大丈夫？）

怒涛の勢い、その言葉がまさしくぴったりの勢いで投げつけられる言葉の嵐。

何とか押し止めようとして声が出せないことに気付く。

少し考えれば当たり前かもしれない口も喉もまた。

感覚を一切感じられないまま、まともに動かせるわけなど無いと思うから。

（ん？どうしたの？）

そこまでの言葉に、何一つ返しの無い事に何かを感じたが、キョトンと首を傾げつつ見下ろされる。

（ん〜…あつもしかして話せない…とか？）

ビンゴ。

と言うか指一本まともに動かしているか全く判らない。

もしかしてただ瞬きとかも出来ているか凄く怪しい状況。

…痛みが無いってかえってモノスゴクコワイデスネ。

（ん〜まだ魂と身体と同調が上手くいってないのかな〜）

小首を傾げてチョット考えてます的な感じのポーズ。

何か知ってるっぽい口ぶりから何らかの解決策を期待せずには居られない。

例え相手が小さな女の子であつても。

というかココに来てかなり正体不明感が急上昇中な何者かであつても。

素で藁にも縋りたい心境な訳だし。

(……まいつか)

(まいつかってちょっと待ていっ!!)

期待を込めた視線をあつさり叩き折ってくれた目の前のコムスメに渾身の突っ込み。

心の中の叫びでしかないのだが抑えようがなかった。

だがそんな一人ツツコミに反応があつた。

(きゃわっ!)

唐突な勢いで飛び上がる勢いで俺から離れ同時に耳を塞がれる。

(もーいきなりそんな大声だしちゃダメっ耳がキーンってなっちゃうじゃない)

耳をトントン。

頭をフルフル。

頬をプククリ膨らましてお怒りモード。

（大声って、俺話せてたのか？声出てるのか？）

可愛らしさが目立ってて全然怖くもないフィーを軽くスルーしつつ戸惑い交じりの確認。

正直言葉を口に出している感じも全然感じない。

（……ム……ジージ意地悪。声は出てないよ。でも今みたいな感じで考えてくれれば私にはちゃんと伝わってくるの。ジージと私はイッシンドータイっていうのだから）

無視されたのが不満なのか軽く睨みつつ、でも俺の疑問にはちゃんと答えてくれた。

とは言え意味不明な言葉の多くに訳の分からない部分も多々あったが。

（今みたいなのって？）

（もう判んないの？だからそういうのだって。えっと……心の中で話す様に？言葉を……考えるのっ。ていうかもう出来てるからそれで良いのっ）

イライラが溜まり過ぎたのかウガァって感じでフィーが吼える。

これは…ちょっと面白いかも。

思った瞬間ギロリと睨まれた。

相変わらず全然怖くないが、それでも少しは控えた方がいいのかも。

完全という訳ではなさそうだが、それなりに思っていることは伝わってしまっている感じだし。

第5話・起き抜けの驚愕（前書き）

そしてようやく冒頭へ

第5話：起き抜けの驚愕

（ところでさっきからずっと気になってるんだが）

興奮するフィーをなんとかため、落ち着かせつつ会話のペースをこちら側に引き寄せる。

如何せん判らない事が多過ぎでどうしようもない現状なのだ。

全てを知っているとは思えないが今は少しでも手がかりが欲しい。

（ん？なにになに？）

ようやく機嫌を取り戻したフィーは楽しそうに言葉を返す。

（お前、何で浮いてんだ？）

俺の視線は天井に向けられているはず。

確かとは断言はできないが、それでも天井ばい装飾の壁でもない限りはありえないだろう。

まあ万が一本当にそんな壁だとしてもフィー自身がどこにも足をつけていないのだ。

プカプカフワフワと、さっきなどクルクルとアクロバティックな曲芸じみた動きまでして見せていたのだ。

（ん？えっと…だってジージ上ばかり見てたから）

しかし返ってきた答えはどうにも不可解なソレ。

しかも「何でそんなこと聞くの」とも言いたげなキョトンとした表情。

うん、この時点で何かが明らかにズレている。

（あと透けてるよな。お前の後ろなぜだか普通に见えてるし）

（そう？）

更なる疑問を向けてもやはりそんな感じの答え。

加えて後ろを見たり自分のお腹を覗き込んだりと忙しい仕草まで。

（俺と会った時はそんなんじゃないかな。なんていうか、普通だった）

小悪党とは言えあんな連中に狙われてたのだ。

決してただのどこにでも居る様な普通の女の子と言う訳ではなかったのだと思う。

思うのだが…

それでも少なくとも見た目は普通だった。

しかし今日の前にいる少女は…

（もしかして死んでるのか？俺ら）

…どう見ても幽霊とかその辺の類にしか見えなくて。

故の結論。

自分としてはかなり認めたくはないが、多分最もありえそうな結末。

（むゝ死んでないよー。そりゃあ最初失敗とかしちゃったけど私頑張ったんだから。ちゃんと上手くいったんだから。だから死んでないもん私もジージも）

しかしながらそんな答えが気に入らなかったのか再びプンスカ頬を膨らますフィー。

（ああ、悪い悪い生きてるんだな俺もフィーも。じゃあ何がどうなってるんだ？というかホント幽霊にしか見えないんだけど、今のフィー）

（幽霊じゃないもんっ。そりゃあ確かに肉体はないからチョット変わって見えてるかもだけど、ちゃんと生きてるもん。というかこっちの方が私の場合普通だもん）

（は？ちょっとソレどういう）

（むむう何？また変なコト言っの）

何気に聞き漏らしてはいけない様な、と言うか突っ込みどころ満

載な言葉に堪らずマツタをかける。

（待て待て落ち着けて、ソレより今…何て言った？）

（何って何よ）

（だから肉体がないのが普通とかその辺）

直感的な勘。

ココがおそらく全ての根底に触れかねない質問であろう。

まあ勘とは言ったもののほとんど確信に近い直感。

（だゝかゝらっさつきからそう言ってるじゃないの。私たちにしてみれば今が普通なの。肉体を持っているのが特別なの）

ハッキリと断言するフィー。

しかし俺から…否、世間一般的に考えれば明らかに異質な感覚。

（…フィーお前一体何者だ）

不意に湧き上がってくるは未知に対しての畏れ。

ただあどけないだけの少女が、唯それだけに見えない。

（うゝ…フィーはフィーだってば………なんか変だよジージ？）

（へっ変っておまっおまえ…お前の方がよっぽど変だっつーの！）

しかしそんな不安はフィーの変な人発言で軽く吹き飛ばされる。

（というかお前にだけは言われたくないぞ）

（ひつどーいつ私のどこが変だって言うのよー）

ムスーっと顔を近づけてくるフィー。

そんな仕草に畏れなんて考えたことすら馬鹿らしくなる。

フィーはどこまでいってもフィー。

もはやたとえ魔王だ神だといわれても鼻で笑える自信が出来た。

（全部だ全部っ何で浮いてるんだよっ透けてるんだよっと言うかゴロツキ連中に追われてたり結界まで用意されてたり死んだと思ったら助かってるは全部が全部全然わかんねー）

そしてそんな自信もなんのその、とにかくわからない事全部ぶちまける。

叫べば少しは鬱憤も晴れるかと思っただ、声に出せないのがかえってその量を増やしてくれた。

（ウガーーーーッ！というかホントに人間かお前はっ！！）

叫びついでにビシリと一言。

無論指一本動かせない現状気持ち的なソレでしかないが。

んでもってそんな俺に対してフィーの

(人間? うっん違っよ)

無茶苦茶普通に一言。

っーか更に加えてわかんねー。

(はあはあ……ていうか落ち着け俺。冷静に、冷静になつて……深呼吸)

上がりに上がったテンションを何とか無理やり押さえ込むための自己暗示。

無論深呼吸も出来てるかどうか判らんからとりあえずしたつもりで。

(いいか、よく聞け、ちゃんと答えるよ)

(うっん)

余裕ゼロな俺と引きつり顔なフィー。

傍から見たらどんな修羅場かよと疑われるかもだが今は二人だけ、問題無し。

(お前一体何なんだ? 何が目的だ? あと今一体どうなってる?)

まずは最低限ハッキリさせたいと感じたトコから。

（えっと…フィーはフィーだから、それで……あっそういえばまだちゃんと挨拶してなかったっけ？）

本当に今更だが、それでも答えは得られそうだからひとまず静観。

そんな俺に対してピシッと佇まいを正してからペコリと一つお辞儀。

（フィーはフィーリカ・テストロスです。10歳です。お母さんを捜しに山から下りてきました。えっと後は……あっそうだ、えっと…あの…人間じゃなくてフェニックスです。これからずっとよろしくお願いします）

そして言い切ったとばかりの満足気な笑顔。

対して俺は…

（……えっ………はいい？）

啞然呆然。

（あはは〜面白い顔〜）

突拍子も無い答えに当の当人大笑い。

（………フェニックスって………えっ？…マジ？………あの、あのえっと幻想種…の？）

（うんっマジまじ〜）

驚いた。

と言うか信じられない。

その存在自体は知ってはいたし、実際会ってもある。

でもまさか目の前のコイツがとは全然信じられない。

なんていうか全然子供なのに…

（えっと…証拠は？）

（証拠？）

（あ、ああ…ほらちゃんとフェニックスだって証明できる何か？）

（ん…）

顎に人差し指をちょこんと、チョット考えてます的ポーズ。

（…あっコレなんか証拠にどう）

えいっと両手の先に出てきたのはこぶし大程の炎。

幻術ではない本物の。

しかし何も燃やさない。

『神炎』

それもおそらくは聖属性、浄化の炎。

最高位の炎術士にまで至ってようやく使い手が見つかるレベルのソレ。

たしかに神炎そのものと言われるフェニックスは手足の延長の如く自在に操る。

（むむゝじゃあコレっ）

驚きのあまり硬直してた俺の反応からまだまだだとしても読み取ったか、今度は全身に神炎を纏い、その身を変化させる。

（どお？コレなら信じてくれる？）

目の前のそいつから変わる事の無いフィーの声が聞こえる。

（あ…ああ………）

その姿に俺は唯呆然とそう頷くしか出来なかった。

決して炎を纏っただけのソレではない。

正真正銘本物の…

…炎という生命。

幻想種フェニックス。

その姿に。

コレは流石に信じざる得ない。

（あつあとそれとジージの事なんだけどね）

言いつつ人の…良く知る少女の姿に戻ったフィー。

それが今までと違って変わった、どこかすまなそうな顔。

（えっと……その…ね）

その仕草に今までの驚きも消し飛ばされる様な勢いで猛烈に嫌な予感を感じた。

何か…本気で、冗談無いぐらいのとんでもない何かかと。

そして知る。

全ての過去を完全に凌駕するソレを。

この日この時この瞬間をもって、俺の人生は180度どころか振り切れ、へし折れ、あさつての方向へ飛んでいってしまった針の如く、全く別物のソレへと変貌したのだった。

第6話：迎える朝

目が覚めて。

そこは見覚えの無い部屋。

聞こえてくる小鳥か何かの囀りが朝の目覚めを意識させる。

「……………はて？」

意識は次第に明確に。

しかしココがどこなのか思い出せない。

「ん……………ん？」

そんな状況にもかかわらず身体は自然と目覚めの動作を。

ほとんど意識することの無いままの仕草だったがそこに違和感を。

視線をやればお腹に顔を埋めたまま眠りこけてる半透明な少女が一人。

「…そういえば……………ココどこだ？」

昨日…

と言うか昨夜はフィーの正体やら俺自身に起きた事とかを聞いただけでイッパイイッパイだった為か、他の何かに気を向けられない

まま寝直してしまっていたことに気付く。

そうココがどこなのか？

どういった状況になっているのか？

あの後結局どうなったのか？

何一つ知っていない事にようやくもって気付かされた。

まあココまで無防備を曝け出してるんだ、敵の手中と言うことは無いだろう。

少なくとも不安や恐れといった感情はフィーからは感じなかったから。

「まっななにせよ聞かなきゃ始まらない事ではあるが。そう急ぐ事でもない…のか？」

判断基準であるフィーの能天気さが少し不安ではあったのだけど。

それでも何所とも知れない場所で爆睡なんていくらなんでもしないだろうしな。

改めて部屋の中を見回してみる。

今まで横になっていたベッドにクローゼット、それと小テーブルと本棚、後は姿見の鏡と。

病院の一室かと思っていたがどうにも違ってしている様子。

シンプルではあるが誰か個人の部屋と感じさせる。

「んゝ状況が判らんっ!!」

現状に予測を立てている中脇腹に刺すような痛み。

何がっと思案を捲つてみればなんと云うか…フィーに思いつきり齧られていた。

「やめいつコラ!」

一瞬呆けたが、その間もハムハムと寝惚け眼で食い付いて来るフィーの顔引き離す。

寝惚けてるせいか思いつきり食いついて来やがった。

だから、引き剥がす要領で軽く突き放してやった。

ほんの…その程度な意識。

幸い俺もコイツも今は身体が小さい。

ベッドの上も転げまわれるくらいにはゆとりもあった。

しかし起きたソレは全くの予想外。

手品か何かかのようにその姿がかききえた。

いきなり。

唐突に。

本当に何の前触れも無く。

「……………フィー？」

思考が一瞬呆ける。

すぐさま布団を捲る。

当然その中にフィーの姿は無くて。

ベッドの下。

天井付近。

部屋の中のどこも見渡す限り。

どこにもその姿が見つからない。

「あ？フィー…何処だ？」

もう一度布団の中。

ベッドも叩いてみる。

変わらない。

出てこない。

「待て、マテマテ落ち着け俺」

動悸が、混乱が激しくなるのが自覚できる。

「落ち着け。落ち着くんだ…スーハー」

呼吸も少し荒くなってる気がする。

「大丈夫だ、うん大丈夫だ」

自身に言い聞かせる。

そうフィーは唯の女の子なんかじゃない、あんなにはあるが幻想種と言われるほどの希少種だ。

だから大丈夫、傍から見て突飛ない出来事でもフィーにしてみればなんでもないことかもしれないんだ。

だから大丈夫。

だから…そうすぐにでも能天気な顔で飛び出してくるぞ。

呼吸を意識する。

心の平静を取り戻す。

深呼吸を数回。

それで心を落ち着かせるに至った。

「まったく、どうにも想像以上に参ってみたいだな」

それとも平和ボケか？

自身を取り戻すまでにここまでかかるとは。

軽く苦笑。

戦時中であれば致命的過ぎる隙だったな。

「さて…ホントこれからどうするかだが…」

貴重な助力がしばらく期待できそうに無くなった以上一人で何とかしなくてはと再び部屋を見渡したところで…

『カチャリ』

…と軽い音と共に扉が開かれる。

「…！」

その音に全身が反応。

一瞬フイーかともいう思いが頭を過ぎった。

が、そうとは限らないと思い返し、解けかけた緊張を再び張り詰めさせる。

「……………」

あと考えられるはココの家人か。

フィーの態度から敵ではないだろう予想はつくが。

それでも自分にとって見ず知らずの何者かであることには違いない。

更にはフィーの事もある。

騙されている可能性は捨てきるには危険すぎる。

そして…

扉は開かれた。

「……………っ…フィーリカ、目が覚めたようですね」

現れたのは金髪に多少の白さを混じらせた初老の女性。

高貴さも感じさせるその身なり。

纏う仕草も貴婦人のソレを感じさせる。

手にしているのは小さな片手サイズの桶か。

（誰だ？）

思わず口に出かけた言葉を咄嗟に押さえ込む。

相手が誰でどこまで知っているか分からない今、下手な言葉は口にすべきではない。

「身体の方は？痛い所、おかしい違和感などなにか異常とかはありますか？」

感情をあまり感じさせない喋り言葉。

表情の変化も小さく薄い。

言葉振りからして保護者かなにかかもと推測は出来るが、どれほどの関係の深さかまでは見極められない。

「……………」

僅かに考えて首を横に振る事で答えとした。

理想としてはフィーの真似でも出来れば良いのだが、流石に無理がある。

だから出来るだけ無難に。

答えに関してはまあ信じがたくとも本当に異常を感じないのは本当だしな。

「…フィーリカ」

しかしその答えに貴婦人の目が僅かに据わった気がした。

「……！！」

とたん反射的に背筋が伸びてしまう。

「何ですその答え方は。言葉が話せなくなった訳ではないのでしょうか？でしたら返事はしっかり丁寧に。判りますね」

「は、はいすみません。大丈夫です問題ありません」

無表情に淡々と。

瞬間、演技もなにも素っ飛ばして答えてしまっていた。

「……？」

そこに何かを感じられたか、しかし追求は無く。

どうにも流してもらえた様子。

「……まあ良いでしょう。ですが今は安静にしていなさい。後で調子が悪く……まあフィーリカにはあまり似合わない言葉ですが。とにかく今日一日は絶対安静にしている事。良いですね、けっして窓から抜け出そうとかは考えないように」

つらつらと連ねなれた言葉の後のやけに具体的な指摘。

多分だが実際やらかしてたんだろうなフィーのヤツ。

「まったくあなたはいつも無茶ばかりして。それにいちいち心配しなければならぬ私に身も少しは気にしていただきたい所です」

と言いかどうにもかなりの問題児っぽい印象。

なんとなく思い浮かべられるその姿にわずかばかりの懐かしさを感じていると、頬に冷たい何かが当てられる。

「…っ！」

「動かない」

反射的な反応も一括のもとに抑えられる。

そのままされるがままに顔を拭われ、髪にも櫛を入れられる。

「それでは後で朝食を持つてこさせますから。けっして外に逃げ出そうとはしないように。良いですね」

ビシヤリと。

ただの眼光だけでそれだけの迫力を出した貴婦人はそのまま出て行った。

普段の表情が平坦なだけにそのギャップだけでも威力は絶大か。

(…ふえゝ…)

途端言い知れぬ開放感が全身の力を抜けさせてくれる。

心身ともにへろへろになりながらも扉の先。

あの貴婦人の出て行ったソコに視線を向ける。

「少なくとも悪い人ではなさそうだけどな」

小さく一言。

言葉遣いや身の振り方からしてそれなりに歴史を持った貴族と言った印象。

主人かそれとも使用人かは、今の御時世から判断に迷う。

けど少なくとも心配はしてもらえていた。

「それにしてもまずは…どうすつかな」

やるべき事は判っている。

とにかく現状の把握。

その為にはフィーを見つける必要がある訳で。

しかしあそこまで釘を刺している以上見張りぐらい居てもおかしくはなさそう。

まあ理想としてはフィーが…

「ジージっ!!」

「うおう」

…出てきてくれたな、ウン。

第7話：幻想種とは

「ジージっ！」

「うおう」

出てきて欲しいと思いかけた矢先にニョキッと現れるフィー。

確かに望みはしたが、いきなり過ぎて普通に驚けない。

「ジージ酷いよっイキナリ落っこすなんて」

しかしそんな俺に構う事無くプンスカゴ立腹中な感じのフィー。

「私すっごくビックリしたしいっぱい痛かったんだからね」

本人は真剣に怒ってる様なのだが全然怖くない。

と言うかそれ以前に今のその状態にもの凄くツツコミたい。

「もうっ聞いているのジージっ」

「あっああ…と言うかなフィー」

「ん何？何か言いたい事あるの？」

「お前ソレどうなってるんだよ一体」

指差してみる先。

「ん？どうて？どうにもなってないよ」

そこを見てから改めてキョトンと見上げてくるフィー。

どこがおかしいのか全然判りませんといった感じのご様子。

「いや、だって…なあ？」

そんな雰囲気におかしいのは自分か？と思いかけもしたが、それでも構わず思っ たままを口にする。

「フィーお前、床に埋まつてるぞ？主に下半身」

そう今こうして姿が見えているのは腰から上だけでその下は床の中へと消えている。

「うん？それで？」

「いや、おかしいだろソレはあきらかに」

かなり直接的な言葉で言ってみたがやはり何も判っていないかの様なフィーの反応。

「だ・か・らっ何床から生えてんだよっ！」

ビシリと良い音でも響きそうな勢いでツツコミをいれる。

「むむ…んっあそか、ジージお行儀が悪いとか言いたかったんだね、アハハセンサーみたいでちよっとヤダー」

「……………」

凄く楽しげな笑い声と共にスルリと床から浮かび上がるフィー。

そんな、ココまできてもいまだ的外れなフィーの言葉に、一瞬だがツツコミすら枯渴する。

「…はあ〜」

ベッドの端にポスンと着地するフィーをチラリと、これ見よがしに溜息をついてやる。

「壁抜けやら浮遊やら…お前は幽霊かつーの」

「ん？全然違……違わくないね確かに」

あつさり認めちゃっててくれますフィー。

そう言えば透けてもいるしなーなんて心の中で一つ追加する俺。

ハッキリ言つて現実逃避だつたりする思考。

ちよつと…ほんのチョットだけでも何も考えずに居られる時間が欲しい。

とは言え現実はその思う通りにはいなくて。

「私たちの種族って言うてみれば生きている幽霊？みたいなのだし」

また妙なことを言い出すフィー。

「ジージって、えっと……あの肉体と魂と……あれ？えっとあと一つは……」

「命だろ、錬金術における生体の在り様に必要とされる三体系の」

「あつうんうんそれぞれそのさんたいけーっての」

嬉しそうに頷きパチパチと手間で叩き出すフィー。

何が言いたいのかはなんとなくだがその言葉だけで予想がついた。

「つまりなんだ、自分が生体の例外だからって事か？」

そう、幻想種と呼ばれる種族のもう一つの呼ばれ方。

『生体の例外』

その存在の在り様が故に、今だに生き物として分類するかすら学者連中の中では意見が分かれている存在。

そもその根底、『生体の三体系』とは生物が生きているとされる上で必須とされるそれらを大きくまとめたものの事であるのだ。

一つは肉体。

物理的存在であり物質的な干渉を司るもの。

基本的には生まれ持った身体がソレだが、それ以外にも鉄や岩、

結晶体など外的要因によってそれらと置き換えられた物もまた肉体に分類される。

一つは魂。

霊的存在であり精神的な干渉を司るもの。

世界にはこの魂のみにて存在するものの在りはするが、それらは生命体とは認識されていない。

幽霊や精霊、神霊がそうである。

意思の存在は認められておらず、稀に意思を感じさせる行動を見せる時もあるとの報告もあるが、大抵は術者の意思の反映、又は自然現象におけるこじ付けとされるのがほとんどである。

そして最後の一つが命。

魂の受け皿にして肉体と魂を繋げるもの。

ソレがどの様なものか、今だ解明できるものも少なく多くの謎があるソレだが、魔術的にも錬金術的にもその存在はハッキリと認められている。

この三つが揃って初めて生命体と分類される。

ただ唯一、幻想種という名の例外を除いては。

幻想種、あらゆる方面から様々な謎に包まれた希少種。

学者の中には存在そのものを疑問視する声もありはするが、それでもなお認められている存在。

彼らは基本的に肉体を持たない。

持つとしてもそれは後天的、自然体と言う意味合いでは魂と命のみの存在が自然な存在なのだ。

そうであるが故に彼らを精霊種と同等と捉えるものも居るがソレを否定する声も大きい。

中には生命体への進化の前段階であるとか、生命体の進化の先となる存在であるとかいう学説まで出てきているのだからなかなか面白い。

そんな彼ら、幻想種がそれでも『生体の例外』として言われるのには先天的には肉体を有しないという一点以外に他の生体との大きな違いが見受けられなかったところにあるのだ。

確立した自我を持ち物質的干渉も可能であつた事。

更には後天的とはいえ肉体を持つ事が出来るいじょう、生体ではないと断言し切れなかったのだ。

故に『生体の例外』。

「うんだからね、肉体が無いときは意識してないと物とかすぐすり抜けちゃうの。ちゃんと起きてるときなら全然問題ないんだけど、さっきみたいに寝てたりとかだとね」

「つまり寝てて意識してなかったからすり抜けたと…じゃあ何で俺にしがみ付いてれたんだ？」

訳を聞いた上での疑問。

もしかしたら元々自分の身体だったからだとかいう考えも浮かんだものの説得力がほとんどない気がする。

「ん？だってジージ生きてるでしょ。なら寝てても気絶しててもくっついてられるよ」

「生きてる…あっあーあーそっか、つまり精神的にくっついていた訳か」

多少言葉足らずだったがなんとなく理解できた。

つまり今のこの身体にしがみ付いていたわけではなく俺というこの身体に宿っている精神にしがみ付いていたということらしい。

「たくなんつーかややこしい。」

「だからジージが寝てた私に何かしたでしょ。私覚えてるんだからねっ私ジージにぎゅってしがみついて寝たんだもん」

「いや、まあそりゃあフィーの事は引き離したが…」

妙に強気なフィーに思わずありのままを答える。

「ほらーやっぱりだーっ」

途端まるで鬼の首でも取ったかの勢いで指差してくるフィー。

「フィーちゃんどうしたの？大丈夫なの？」

そんな俺たちの騒ぎを聞きつけてなのかちょっと慌てた様な少女の聲が扉の外から聞こえてくる。

（まずい、見張りの可能性をすっかり忘れてた）

戻ってきてからのフィーのハイテンションに引きずられっぱなしで警戒なんてどこかに置き忘れてた事実は今更気付く。

「あつこの声カナちゃんだ。うん全然大丈夫だよー」

なにやら空けるのに戸惑っているらしく、ガチャガチャと音がしばらく。

フィーの声に何も反応をしないところを見ると多分聞こえちゃいない様子か。

「フィーちゃんっ！！」

多少長過ぎな一泊を置いて扉は勢い良く開かれる。

そこから姿を表したのはフィーより少し年上か？見た目12か13才位だと思われる少女。

「カナちゃんただいまー」

現れたその少女にフィーが文字通りの意味で飛びついていく。

「フィっフィーちゃん!？」

「うんっフィーだよー」

突然飛びついてきたフィーに目を白黒させる少女、カナちゃんと
言ったか。

おそらく友達なのであろう、そんなカナちゃんとやらの反応をお
もしろげに笑うフィー。

そして俺は…その少女がフィーの姿を目で追っていた事実気付
かされて頭を抱えていた。

（普通に見えるのかよ）

幽霊に近い存在との事で抱いていた希望的予測が木っ端微塵に碎
かれる。

「フィーちゃんどうしたの？大声で騒いでて。何かあったの？」

「んーそんな事ないよーただちょっとジージが意地悪したから怒っ
てただけだから」

「ジージ？」

呼ばれた事で反射的に顔が声の主の方へと向けられる。

「……………」

「……………」

目が合った。

「……………」

「……………」

少女の視線が再びフィーに戻される。

「……………」

「……………（汗）」

そしてまた俺に。

「……………フィーちゃん？」

「うんっフィーだよ」

視線で問われたのは少女の首に巻きついたままのフィー。

「……………フィーちゃん？」

そしてもう一度、一語一句違いなまったく同じ問い。

「……………違う」

しかしフィーとは違い搾り出すかのように答える俺。

「あ…えっえっええ…あれ？あ…えっ？ええっ！！」

俺とフィーを視線が行ったり来たり。

これでもかつてぐらいな混乱の様子。

フィーは面白がっている様子だが俺は心の底から溜息を吐き出さなくなった。

「はあ~~~~」

本気で思う。

(どうすればいいんだよ俺は)

この世に神様なんてのが居るのだとしたら俺は俺が思っていた以上にソイツに嫌われてたのかもしれない。

なんと言つか…ふと脳裏に生き地獄と言つ言葉が浮かんできたのはけっして間違っていないと思うぞ。

第8話：『私』の名前は？

「えつと…カナリア・リフィアスです」

カナリアと名乗った少女、件のカナちゃんがよろしくお願いしますと頭を下げる。

「えつ…と……………こちらこそお願いします」

なにか変に感じる挨拶、と言つか名乗り。

とは言つ俺もつられて同じ様に名乗る。

「えつとねジージはジージって言って私を助けてくれたの」

そしてそんな微妙な空気などお構い無しのフィーは俺たち二人の間でニコニコと能天気笑う。

「ジージ…ちゃん？ですか？」

そんな感じのフィーの言葉にちょっと困ったと言った感じでカナリア。

「本名じゃ」

「あつああ、違う違うジージってのはコイツが勝手に呼んでるだけ」
言いたい事を察し軽く笑いながら事実を伝える。

「では貴女のお名前は？」

「……………えっ……………」

それは何気ない問い。

本人にしてもただ何気ない会話の流れでの言葉でしかないであろう。

ただ、当の聞かれた側としてもらえれば言い淀むのも仕方ない問
いかけ。

（な…なんて…どうしよう）

自分でも表情が強張っているのが良く判る。

すぐに返ってこない答えに「ん？」と首を傾けつつ素直に言葉を
待ってくれているカナリアがそんな自分の様子に気付いてないっぽ
いところが多少の救いか。

とは言えこのまま名乗らないのはあまりに不自然過ぎるような気
がする。

ジーニアスの名はダメ。

明らかに男名で、今の自分は子供とは言え正真正銘女の子の姿。

認めたくなくても変わらない事実には内心思わず涙。

フィーリカの名もダメ。

出会いの時にすっかり否定したし、目の前に本人も居る。
となると偽名だが…

「…んっ？どうしたの？えっと…ジージちゃん」

言いあぐねている俺に対して心配そうなカナリア。

しかしながらそう簡単に名前なんておもいつきはしない。

と言うか名づけ自体やった事なんてない。

「どこか痛いのか？大丈夫？先生呼んで来ようか？」

ついにはそんな言葉までかけられる始末。

俺ももう必死で頭を廻らす。

それはもうもう何でも良いとばかりに。

条件は二つ。

女名である事と。

ジージという呼び名になりうる事。

その二つに該当しそうなのは………

「……ジルコニア」

「ん？今なんて」

「ジルコニア…です。私の名前…」

ようやく思い至ったその名前を口に出す。

それは昔いろいろと周りの世話をしてくれていた侍女の妹の名…
だった筈。

話しの中に、それもただの雑談の中で出てきたただけな為結構曖昧だが。

ちなみに一人称は流石に『私』とした。

『俺』という一人称がどれだけ今の自分に不自然かなんて指摘されずとも十分に判っている事だから。

「ジルコニア……ジルちゃんですね」

パチンと両手を合わせて満面の笑みのカナリア。

名前が判ったのがそんなに嬉しいのか。

「じゃあ改めてよろしくです。ジルちゃん」

「えっと…こちらこそ」

差し出された右手をギュッと握り返す。

「あーっ二人だけでなんてずるいずるいー」

そんな俺たちの手にギュッとしがみついて来るはフィー。

「わっあわわっ」

フィーの突然な乱入に驚き、勢いのままに尻餅までつくカナリア。

「あははそうだな、フィーもだよな」

そんなフィーのテンションにいい加減慣れ始めていた俺は動じる事無く苦笑交じりにフィーの頭をポンポンと軽く撫で叩いてやり。

「大丈夫か？…カナちゃん？」

カナリアへとほどけた右手を今度はこちらから差し出す。

「……………はいっありがとうございます」

一瞬の呆けはあったものの、こちらの意図に気付くと同時に満面の笑みでそれに答えてくれた。

「あっそうだ朝ご飯。ちょっと待ってて」

そこで思い出したかのように、と言うか実際思い出したのである。うドアの外へと何かを取りにトテと走っていく。

まあソコに何がというのはまあ先の言葉通りの物だろう。

しかし…

「リフィアス…か」

口に出たのは始めに教えられたカナリアの名、その家名の部分。

その家名には聞き覚えがあつた。

と言うかある程度のレベル以上の魔術士やそれなりの権力者であれば知らない方が少数とさえ言えるほどに有名な名だ。

「となると…多分だが予測はつくな」

断定は出来ないが、それでも先程までとは手掛かりのレベルが雲泥の差だ。

たった一つのそれだけではあっても、流石にリフィアスの名は大きい。

リフィアス家。

おそらく魔法に関わる者のほとんどが一度は耳にしているのではないか。

かつて世界の魔法の根底とまで言われた研究教育機関。

サニア魔法学院。

その発展を支え、担い続けてきた一族らの代表にして中心となっていた家系。

「学院が潰れてから10年と少し。流石に建て直しもそれなりに進んでいたと言う事か」

そう当時栄華を誇っていた学院は既に昔のものと言ってもいい。

当時…と言うよりか戦争が本格化されだしてきた頃からか。

その研究機関としての一面により敵国家より常に狙われ、戦時最大にして最長に亘る激戦区として在り続けた。

そしてそれも10年前の大攻勢よって決着がつけられていた筈。

とは言えソレはもはやそれだけの年数を経た過去。

その上戦争自体も二年とはいえまた過去。

いささか早過ぎる気はしないでもないが、それでもある程度復興の形は整えられ始めていたと言う事か。

「まあリフィアス家が生き残っていたのならあり得ない事でもないか」

それだけの影響力は確かに考えられるから。

「んゝジージどうしたの？」

声に目を向ければ少しつまらなそうにフィーの顔。

苦笑混じりになんでもないと頭を撫でてやる。

「でだ、ココは…」

「お待たせしましたー」

フィーへの言葉は言い切る前にカナリアの言葉に覆い被せられる。

まあ急ぎとまではいかない事ではあるし良いかと。

「朝ご飯…えつと一人分しかないけど大丈夫です？」

手にしているのは少し大きめの盆。

視線の先は…フィーか。

なんとなく言いたい事は判った。

「えっ…と…どうなんだ？」

とは言え幻想種の食事情など俺だって判らない。

となるともう本人に聞くしかない訳で。

「んゝそりゃあもちろん私だって食べたいよ。でも無理だから。ジ
ージ全部食べて」

人差し指を口に、凄く物欲しそうに言われても…

ハイそうですかと手をつけられる筈も無く。

「いや、食べたいなら食べたいで一緒に食べれば…」

「そうですよ、無理はダメです。らしくないですよ。それに足りないなら先生にお願いして追加で作ってもらえれば良いだけです」

「んーだから無理なの。食べられないし、食べる必要も無いの。食べる為の身体もないし食べて維持しなきゃ身体も無いんだから」

「え？なにそれ」

フィーの言葉に少し困惑気味なカナリア。

事情を知らないが故に仕方の無い事か。

反対に事情を知っている俺としては天を仰ぎ見るしかない。

「そっか…そうなるんだな」

言われれば確かにと納得できる事ではある。

「え？え？ジルちゃん分かったの？」

困惑気味なカナリアにどう説明したらいいか。

「ジージご飯食べるんですよ。私ちよっとお散歩行って来るから」

場の空気感じたのか、単なる天然か、当の本人はそんな俺たちを置いて壁の向こうに。

「ええっ！フィーちゃんっ！？ジルちゃんどういことなんですか？」

ただでさえ分からない事だらけの中更に壁抜けまで見せられて混乱に拍車のかかるカナリア。

「ったくアイツは…ほら、カナリアも落ち着いて落ち着いて。な、ホラ深呼吸深呼吸」

そんなカナリアをなだめ落ち着かせながら先程のアレは天然だったんだなと遅ればせながら確信に至ったりするのだった。

第9話：その二人

「でも本当にそっくりですよね」

食後のお茶を飲む俺の顔をジッと見ているカナリアからの感嘆のため息。

まっ当然と言えば当然なのだが。

何せこの外身、当のフィー本人のものなのだから。

「その辺りはな：まっ色々あるんだよ色々とな」

苦笑交じりの言葉に若干の言い難さを混じらせて。

このまま遠慮してもらえれば御の字。

さらに欲も言えば都合の良い感じに勘違いしてもらえたらといった感じが。

軽めの朝食も終え、食後のお茶の一時。

ここまでくれば流石のカナリアも余裕を取り戻してくれる様子。

朝食を置くだけ置いて「フィーちゃん捜してきますー」と飛び出されたときは一瞬本気で追いかけるべきか迷った。

結局はそのまま放置。

と言うか正直止められなかった。

何せ気づいたら最早ただ足音が聞こえるのみで姿は見えずな感じだったし。

まっ結果としてこれで良かったのだとは思いはしたけどな。

なにせ経験上、こういう時はどちらを選んでもトラブルという名の騒動に巻き込まれる確率が高かったから。

それならなおの事、空腹は満たしておきたいと思う自分はおかしくないだろうと思う。

以前似たような状況で結果三日三晩食べ物はおろか水の一滴すら飲めなかった時の事が一瞬脳裏を掠めたせいでは決して無いと思いたい。うん。

「でもフィーちゃんより落ち着いてて大人っぽいですし…やっぱりお姉様なのですよね」

聞いてはいけないと感じつつも好奇心を抑えきれないのか。

遠慮がちな、しかし消えることの無い言葉。

こんな所はまだ幼さを感じさせるな。

「……まあ肉親といっても良い様な感じではあるのかな…多分…ちよつと微妙な気もするけど」

元は別とはいえ、自身がこうなった経緯を思い返せばそんな言葉

も出てくる。

苦笑交じりなのは自体の滅茶苦茶さと一息付けるだけの現状故か。

「はぁそうなのですか？…ではこの度はフィーちゃん…あついえ、フィーリカを迎えにという事なのでしょうか？」

「あつあぁ、あんま畏まらなくて良いから。それとフィーの呼び方も言い易い方で…なっ」

「すつすみません」

これまでの自身の言動か。

それを改めた事が。

またそれを指摘された事なのか。

途端に恥ずかしそうに顔を赤らめ始めるカナリア。

率直に可愛らしいと思える仕草は微笑ましい。

「ところで迎えかにつてのはどういうことだ？」

言葉の内にあつたソコを率直に尋ねてみる。

「えっ？ジルコニアさんってフィーちゃんのお姉さんなんですよ？ですから家出したフィーちゃんを迎えに来た…とかそういった事では……ないのですか？」

「あつそういう事」

カナリアの言葉に軽く納得。

なるほどなるほどそういう風に捉えた訳か。

「んーまっそう言う事じゃないんだけどな。フィーとは今回の事で始めて会ったんだしさ。そういう意味では家族って訳でもないのさ」

「え？えっ？ええ？」

無茶な言い訳に案の定訳が判らないといった感じなカナリア。

「んっだからホント色々ややこしい事とかあるからあんまり聞いてくれない方が助かる」

「あつすみません」

流石に直接的な言葉は恐縮させるか。

とは言え正直になど話せないのはどうしようもない。

前夜（？）の小悪党同様、幻想種の…中でも特にフェニックスは狙う者が後を絶たない。

存在自体が伝説や噂の類と言われているにも関わらずだ。

なにせ不老不死の体現とさえ言われてる。

事実、伝承、噂、様々な形で生命の奇跡を成した種と謳われてい

る種族。

実際救われた俺だから確信は持てているが。

そうでない…ただ伝承のみを鵜呑みに、真剣に信じ追い求める者が後を絶つことが無いのだ。

さらに最悪なのが、そういった輩が権力者の中にこそ多いと言う悪夢。

フィーのことも俺の事も露見した時点で最悪な未来しか思い当たらない。

しかも昨夜のあの小悪党。

あきらかに背後に黒幕がいた様子。

どこまでフィーの事を嗅ぎ付けていたかは判らないだけに警戒は怠れない。

「そつえばフィーのヤツいつからココで？結構長かったりするのか？」

ふと思う部分もあって今度はこちらからカナリアへ。

「あついえいえフィーちゃんが家に来たのは…つい最近です、ハイ。えつと…たしか一週間くらい前の…夕方頃でしたかしら。何でも街外れの川原で野宿しようとした所を保護してきた…とか？たしか」

多少記憶が朧気なのか詰まり詰まりながらの言葉。

（一週間か…）

一生懸命思い出そうとしてくれているカナリアには悪いが状況とかその辺りは今はいい。

必要なのはフィーがリイフィアスの庇護下に入ってどれだけかと言うところ。

（準備期間が長引いたとしても…それでも脱走のタイミングに合わせていた感じだったしな…）

タイミング的にフィーがリイフィアスの庇護の目から離れる時を待っていたと考えられるか。

背後の権力の大きさはともかく、それでもリイフィアス家の内にいればそう簡単に手は出ししてこれないだろうから。

例えどれ程の相手であつたとしても、無茶な騒動を力ずくで抑えられる相手ではないのだリイフィアス家は。

全盛時代からの影響力は一国等という枠では治めきれないほどに広く深い。

ある意味において神聖教会とその在り様が等しかったとさえ言い表せると俺自身は感じていた。

しかしだからこそ今は下手に動かないほうが良い。

コチラが尻尾を掴むのが先か。

アチラに出し抜かれるのが先か。

何にせよその時には一騒動起きるであろうは確実。

問題はこの身体でどこまでやれるかだが…。

「つたく、何だってこう次から次へと…」

本当に、頭痛のタネには事欠かない。

「まっなんにせよ今一番の厄介ダネが現在進行形だっるのがな」

「ん？どうしたんです？ジルコニアさん凄く難しそうな顔をして」

「ん？ああゴメンゴメン顔に出てたか」

心配気なカナリアに「ちょっとフィーの事でねー」と軽い苦笑を表情に浮かべてみせる。

「あ…ごめんなさい。そうですねフィーちゃんもあんな風になって大変な時だって言いますのに…フィーちゃんもきつとつらい思いしてますのに…」

「あー…いや、それに関しちゃ大丈夫だから。アイツ全然気にしてないからさっホントちよつとくらい気にしてくれてても良いと思えるぐらいにさっ」

先の一言をどう捉えたのか涙ぐみ始めたカナリアをあわててフオロ。

まあ言葉自体は取り繕うまでもない本心ではあるのだけど。

「本当に、少しぐらい大人しくしてくれてれば楽なんだけどな〜」

階下の広間でペットのネコとじゃれあっているらしいフィーの姿を思い写しながら。

「…飽きてでもしてふらふら外に出てってなきゃ良いけど」

思わずしてポロツとでた言葉。

何故だろう、そんな情景が凄くリアルに思い浮かべてしまう。

「わっわたしちょっとフィーちゃん呼んできます」

カタリと立ち上がったカナリアの慌てた様な焦りながらな様子。

どうやら想いは同一だった様だ。

「まったくホント気が休まる暇もない」

フィーと出会ってココにまでの時の端的な感想。

その上心の何処かで「何時もの事だろう」と呟いている自分もいて…。

「ホント少しぐらい否定できたらまだマシ…いやそうでもないのかな〜」

もう少し楽で利口な生き方が出来たらとは思っが、だからと言って結局ほっとけなかったから今が在る訳で。

「結局性分なのかね」

苦笑交じりに菓子を口に。

過去も思い返してみれば似たような事ばかり。

「なにせよ狡賢く見て見ぬ振りなんてヤツにはなりたくもねえしな」

例えそれこそが平穩への最短距離だとしても。

「やっぱ性分だな」

結局は事の大小大きさの違いだけで。

神様への恨み言は数在れども後悔はそれ程でも。

浮かべた笑みは随分軽かった。

第10話：エスアリア

コンコン

カナリアが出て行ってしばらく。

ノックの音が部屋に響いてきた。

「ん？カナリアか？どうぞ開いてるよー」

フィーを何とか引っ張って来れたのかと軽い感じで入室を許す。

すぐに入ってこようとはしない辺り騾の丁寧さがうかがえる。

（フィーを抑えとくだけでも大変だろうに）

そんな扉の向こうの情景に内心で笑みを漏らしながらそっと待つ。

そして…

開かれた扉の向こう。

そこには確かにカナリアがいた。

フィーもいた。

ただ予想外はその二人を間に立つ一人。

「色々と聞きたい事があるのですが…よろしいでしょうか、ジルコニア嬢？」

確か出掛けている筈のエスアリアがそこに居た。

感情をあまり窺わせない少し冷めた様な表情に平坦な声。

相変わらずな印象そのままの姿でそこに居た。

言葉はあくまで尋ね口調。

だが拒否権など欠片ほども見当たらない。

「カナリア、フィーリカ、これから少しジルコニア嬢とお話がありますので、しばらくカナリアの部屋に居てらっしゃいな」

両脇に控えていた二人もまた同じ印象だったか、言葉をかけられるなりすぐさま踵を返して行く始末。

「さて、まずは何から伺いましょうか？」

改めて視線を向けられ。

背筋に一筋汗が流れた気がした。

そして…

………

……

…

吐かされました。

それはもう見事なまでに。

一から十まで全部が全部。

フィーととの出会いから夜の一件の最後に到るまで。

隠したい事からバレたら素で洒落にならない所まで何もかも。

フィーの事は…まあ気付いてたみたいだから良しとしよう。

しかし俺自身の元の素性まで明かされた時などマジで終わりとすら感じた。

と言うかだ、例の夜のいざこざを一通り話し終えただけで「という事は貴方は魔王ジーニアスという事なのでしょうか？」等と余りに直接的な、あり得ないほどにピンポイント過ぎる言葉に思考が一気に吹っ飛んだ。

動揺は一瞬…なんてもんじゃなかったな、ウン。

多分それが完全な命取りと感じた。

「……まさか本当に？」

次いで告げられた再度の確認の言葉に最早頷くしかなかった。

その二言目には確かなる確信的をもつてしての確認の意が感じられてしまっていたから。

その瞬間本気で自分の選択ミスを悔やんだ。

何せそれは一言目であつたのならばこの場においては誤魔化せていた事を知らしめる言葉でもあつたから。

しかもかなり容易にだ。

「……………」

「……………」

「…………… 本当なのですね」

長い… 一時の間を置いて。

ついにの三言目。

俺もまた再度首を縦に振る。

「ああそつだ、確かに俺の名はジーニアス・クルスセトだ。魔王という通り名は本気で甚だ不本意で認めたくないがな」

こうしてお互いがお互いを正確に認識した上で真正面から向き合ったのだ。

もはや誤魔化しなど何の意味もない。

ただ腹を決めるのみだ。

正直、今この状態で逃げ出せると思えるほど甘い考えは持ち合わせては居ないのだから。

そして改めて始められる。

問い掛けという名の尋問…

いや、むしろあれは拷問と呼んでも良いかも知れない。

本気で本当に、これまで経験したこともない程に苛烈な時だった。

流石というかなんと言うか。

どうしてこう教師という人種は…。

「まったく…多少は聞いていましたが、本当に世間一般にて囁かれている人物像とは随分とかけ離れていますね」

「それともそう見せているだけですか？」

紅茶を注ぎ足しながら呆れた様な溜息。

少しもそうは思っていないのが丸判りだ。

「なんだよその人物像ってのは」

思わず聞き返してしまった。

なんとなくいやな予感。

と言うか、ろくでもない答えが返ってきそう。

「ですから一般的な貴方への印象ですと言ってるではないですか」

強調する様に改めての言葉。

「幾つもの大陸、国と言う国を巻き込み世界中を争いと混乱に巻き込んだヌーム帝国の影の支配者。凶王ガルバストロスを影で操り、終焉終末の巫女をかどわかせし真なる黒幕。その性格は残忍にして狡猾。時に自ら世に降り立ち、騒乱の火種を撒き散らす様は悪鬼の如く」と、まあ大体の所この様な感じですね。幾つかの逸話も耳にしていますが聴きますか？」

当たり前な事を当然の様に語るその言葉。

ただ淡々と語られると何故か真実味を感じてしまうのは俺の気のせいだろうか？

いや、まっ事実無根だってのは俺自身ハッキリクッキリ判ってますよっ。

ただまあそんな風に語られちゃうと…

恐るべしと素直に認めてしまっべきかどうか。

「いやイイです。聞けば聞くほど凹みそうだし」

勘弁して欲しい気持ちに押しつぶされるように布団に顔から突っ伏す。

「まあ、こうして見る限りとても噂で語られるような悪鬼羅刹とは見えませんけどね」

「んなの当然だろ。デマだデマ、一から十まで全部が全部な」

「まったくのというのには少し疑問を感じますが、まあ確かに貴女の言葉の方が真実には近いのですね。最も貴女が本当に魔王ジーニアス本人であるというならの話ですが」

相変らずな平坦な話し口調。

しかしわずかに垣間見えた愉快そうな声色に顔を布団から横にずらす。

「まだ疑ってるんだな、そこん所は」

「当然でしょう。信じるには余りに奇天烈な話です」

「まあそうだな」

その言葉には激しく同意をしたい。

たとえ俺自身の事であっても。

「んでどうするんだ？悪名高い魔王がこうして無力に伏せてるんだ、

捕らえられるにしても殺されるにしても抵抗らしい抵抗は出来ないぜ」

余裕ぶつての言葉はしかし真実でもある。

最期としてはかなり情けないものではあるが、まあまともな終わり方などありえないとは思っていた。

覚悟なんてしてた訳じゃない。

潔さなどに囚われてなどいない。

生き汚くとも足掻くだけ足掻こうとは常々思っていたことだ。

しかし…

「流石にこの状況、チェックメイト以外ないだろうしな」

不思議と笑えている自分の内面は自分でも良く判らない。

ただ在るがまま、それだけだった。

「まっ好きにすると良さ」

言って、トサツと身をベッドに沈める。

諦めたという感じではない。

ただ会話の終わりを行動で表しただけ。

そして最後の言葉を待つ。

自身がどうなるか…

（なんとなく何を言われても受け止めれちまうような気はするけどな）

わずかな仕草の気配。

審判の時。

その瞬間。

そして俺の心持など言葉通り、ただ気がしただけの事だと痛烈に感じさせられた。

「それは願ってもないこと。では私の元にて魔法学の探求の手伝いをしていただきましょうか」

「はあっ？」

「あら、どうしましたかその様に声を荒げて」

「手伝いつて…えっ……なんだよそれ、んな出来る訳が…」

それはあまりに意外すぎる提案。

意外というかあまりに危機感の無い考え。

最もそう感じたのは俺だけのようで。

「そうでしょうか？先の大戦で多くの先人や教えが失われたのです。深い知識と経験をもつ逸材を私が見逃そうはありますがありませんか？」

目の前の淑女は当然の事と逆に首を傾げてさえ来る始末。

「そつそりやそうかもだが…良いのかよ、問題になるなんて生易しいレベルじゃねえぞ」

それこそ発覚し次第、俺共々逆賊として世界中を敵にしかねないほどの。

加えて既に魔王としての自分の事件への干渉がどこからか掴まれている現状。

正直、真相の露見も時間の問題か…

それとも既にか…

ともあれ隠しきれる状況など、とおに過ぎていると思わざる得ないと言っのに。

「何故ですか？」

しかしそんな俺の懸念をもエスアリアは軽く笑みを浮かべるだけ。

そのあまりの反応に感じるは軽い苛立ち。

「何故って…そりゃおい…気付かないはずがないだろう。俺が…」

「ええそれは確かに確認しましたし」

感情のままにぶつけようとした言葉は、しかし絶妙のタイミングでその言葉尻を取られ。

「あなたが…おそらくなにかしらの原因にてでしょうが、自分自身を魔王であると思い込んでいる十数歳程のただの女の子である事はええそれはもちろん。で、何か問題が？」

あまりの言葉に二の句が次げない。

「……………つまり信じてないと」

それは俺と言う成り立ちの否定。

「ええ信じませんとも、私にとってその方が都合が良いですから。貴女は違いますか？ジルコニア嬢」

「……………違うない…けどよ」

改めて言い含められた言葉。

なんとなしにその意図は掴めた。

しかし…

「なら良いではないですか、普通誰も信じませんよ。それとも魔王という地位に未練が？」

そんなもの…それこそ考えるまでもない。

首を軽く横に振り、改めて見上げるその顔は無表情ながら何処か可笑しそうに見えて…

「ようこそ、初めましてジルコニア嬢。リィフィアス家当主として貴女の新たな門出、歓迎させていただきます」

最早言い返す気すら起きない。

「…勝手にしろ」

「ええ勝手にしますとも。それは貴女が言い出したことですから」

「まったく本当に…」

（…随分と逞しい女だ）

言葉の続きは心の中だけに。

この場合、流石と褒めるべきなんだろうな。

第11話：真相の裏側

「…なあ幾つか聞いていいか？」

ソレは言葉遊びのようなやり取りもようやく終わりを見せてのと。

わずかな間の後の一言。

「ええ、どうぞ」

返答は相も変らぬ様子であつさりと。

「もつとも事が事ですので望まれるままにお答えできぬ部分もあるでしょうが」

続けられた言葉の裡になんとなく気にかかるモノを。

「ですがジルコニア嬢が一番聞きたいことに関しては問題ありません。と言いますか聞かれる意味もそうあるものではありませんね」

そして言葉の最後まで聞いてみてその感じたモノの招待にも当たりがついた。

予想が付いているのだろっ、俺の内情について。

答えられないと言つのは事件の事だろっ。

なにやら単なる小規模なイザコザというにはニュアンスが重そう

だが。

そして聞く必要の無いと言うことは…

ダメだ、思い至る節が見当たらない。

確かに俺自身を真なる意味で知るものは極わずかだろう。

しかし聞くまでも無いことでは絶対にありえない。

何せあらゆる意味で死活問題。

はつきりさせておく必要はいくらでもある。

そんなこと、目の前の彼女にも判りきってはいるだろうに。

それともほかになにか隠しだまでも？

「聞く必要が無いとは？」

(……………まあいい、それもソレもじきに見えてくるだろう)

まずは相手の答え次第。

「なににせよ俺にとっても「ハイそうですか」で済ませれるほど軽い話でもないわけだしな。それでもはつきり言葉で聞きたい」

一旦言葉を区切り、言葉に強い意識を乗せる。

言葉そのものに力を込める言霊と言う技法。

専門外故に効果に関して期待は持てずとも、真剣さは伝わってくれるだろう行為。

「まず…何故俺の話から魔王の名が出てきた？」

それは先程の尋問紛いの問答での最中のコト。

「少なくとも俺はソレをおわす様なコトは一言たりとて言っただった筈だ。少なくとも断言しても良いと思えるぐらいには思っているぞ」

そう、こうして事後の説明を求められていることに関しては、非常に遺憾ながら結構経験豊富だったりする。

と言うよりは過去のそれらに関して言えばたいいの場合さらに悪質だったりするが故にまだまだぬるい。

ミスはなかったはずだ。

にもかかわらず…

「それでもその名が出てきた。別にこの街を拠点にしている訳でもなく居を構えているわけでもない。変なトラブルにだってこの街では今回のが初だ」

そう、不本意ではあるが知名度とトラブルには事欠かない俺ではあるが来て早々そう立て続けのトラブルなど……

…少なくともこの街では遭遇してはいない。

そのうえ魔王の名など、そうそう挙がるものでもないのだ。

第一噂と現実では天と地との程のギャップがあるのだから。

それこそ当時の顔見知りでもなければというレベルである。

「おそらく…そうだと思うが、貴女からのはっきりとした言葉で確信したい」

予測はつくがあえて言葉にしぬままに聞く。

誤魔化しや有耶無耶な答えで煙に巻かれることほど危険な事はないから。

本当に悲しいコトながらそれが俺の立場なのだ。

真実はどうであれ世間一般に認識されているソレは先程のエスアリアの述べた言葉そのまま。

語られはしなかった逸話というのもまた似たり寄ったりなものを俺自身の幾つか聞いたことがある。

知り合いからのからかいであつたり無関係の他人からの噂話だったり、経緯は色々だが。

更に面倒臭いコトにそれらは100%嘘の出鱈目だけじゃない所なのだ。

もっとも内容はこれでもかってほどに捻じれ歪みまくってる訳だ

けど。

故に魔王と俺とをイコールで結ばれると真剣にヤバイのだ。

それは素で死活問題。

在り様が在り様だけに国そのものが動くというのも普通にありえる話になってしまう。

まあ以前はともかく今の自身では三流の刺客どころか一般人一人をすらどうこうできなさそうではあるがな。

「あとは今回の騒動についてもだ。連中らはあきらかにフィーリカを特別な存在として狙っていた。ただの人攫いなんかじゃありえない、わざわざ封魔結界なんてもものまで用意していたぐらいだしな」

あれはただの人攫いなんかじゃない。

幻想種相手としては手段と対策は的外れではあったが、確かにあれは子供一人を攫う準備ではなかった。

「そして今俺への応答。魔王や幻想種の関わりまで予測がいつていて、このやり取りはあきらかに不自然。そう、もし関わりが表ざたになっているとしたら例え巻き込まただけの可能性のある少女に對してもただ普通に話を聞くだけというのはありえない。

逆にそこまで調査が到っていなかったとしたら魔王の名が出てくること事態がそもそもありえない」

感じた違和感を一つ一つ言葉にしつつ。

先程の尋問を経た俺に油断はない。

「聞くまでの意味はないと言いましたが、どうやらそうでもなかったようですな」

エスアリアの軽い溜息。

「どうやら随分とお互いの認識に隔たりがあるようですし…そうですね、お話ししましょう、今回の私たち側からした事件の認識を」

言いながら脇の椅子を引き寄せ静かに腰を下ろす。

どうにも長くなりそうな予感。

「ジルコニア嬢も楽にしてくれてかまいませんよ」

かけられた言葉はソレを確信へと変えてくれて、俺も聞き易い姿勢へと身をずらす。

無論警戒は解くまではしないが。

「ではあの方が来られるまでの間、少しお話しする事としましょうか」

ソレは語り始めの為の一言。

そこになにやら聞き流せない一言が混じっていたが、エスアリアの続けられる語りに話の腰を折り損ねた。

「私どもが事の異変を感じ取ったのは…おそらく貴女が最後の魔法

を使ったその時になりますでしょう。当時フィーリカを捜していた所に感じた二種類の魔力。私が現場に駆けつけた時には貴女がおっしゃっていた通り氷像と成り果てた不当者らの中心で気絶しているフィーリカを…貴女を見つけ保護した次第です」

「…二種類の魔力？」

「ええそうです。おそらくは後のソレはフィーリカのモノでしょう、件の…貴女の元の身体を灰にしまったという…」

「…ああ、更に言えば俺の魂を自らの内に取り込む行為も含めてだろうな」

「でしょうね。その後同じくソレを感知してでしょう衛兵が駆けつけ調査が行われる事となりました。状況こそ多少特殊な状態でしたが仲間内の仲間割れか何者かに返り討ちにあったかという結論にて翌朝から周囲の警戒と魔術式の行使者の調査も兼ねて巡回する事としたぐらいで、そう重要視される問題にはなりませんでした」

そう、そうなること自体は予測の範囲内。

戦が終わりを見せたといってもそれはほんの二年前でしかないのだから。

争いは世界中でいまだ収まりきれていないし治安も決して良いとはいえない。

「まあそうだろうな、普通なら」

そう普通なら。

この程度の規模、魔法使いが絡んだ事件においてはありえないレベルでは決してない。

「……で、何故そうならなかったんだ？」

しかし今回はそうは捉えられなかった。

「何故か…それは翌朝、騎士団並び常駐所に駆け込まれた者からの報告…被害届けが原因です。駆け込まれた者は合計で6人。彼らの訴えはこうです「自らの主人、もしくは知人が凍てつき死んでいる」と」

「おっおい、翌朝って…そんなに経っているのか？ 昨晚のことじゃない？」

「ええ、事は既に三日前の事となっております。しかし被害については驚かないのですね」

俺の発した問いの方向に少し意外とばかりに言葉が投げかけられる。

「ああ、なんとなく何がどうなったか俺も判りかけて来たからな。そこんところは少し考えれば確かにあり得る事態だって気付いた。まっ一応その魔術式の行使者だしな」

そう、それは確かに考えられる状況。

というよりむしろ予想以上に狙い通りだった結果だ。

「あの魔術式は決して無差別に凍らせるだけの力押しのもじりじゃない。特定条件：今回はフィーリカを狙っている奴等を対象に、縁の糸を伝ってその相手全てに牙剥く様組んだもじりだ。おそらく他の連中もアイツらの関係者もしくは協力者だったりするのだろうか？調べはついてるか？」

「いいえ、まだ被害者の関連性などについては明らかにはなっていない筈です。それにその中の2名は貴族に連なる方々でしたので、そう無闇に踏み込めるものではありませんでしたから」

「貴族……か。なるほど、とするとあいつらは雇われ者とかそんなんじゃないかとそんな感じの関係だったのかもな」

エスアリアの言葉は文句無しに上出来な結果が得られた事を俺に教えてくれていた。

「……どういう事です？」

そしてその満足げなつぶやきに怪訝な顔をするエスアリア。

「ん？ああ言っただろ、あの魔術式は縁の糸を伝ってその先にいる対象に牙を向けるもじりだ。今回の場合はフィーリカを狙う者、その身を得ようと縁を伸ばしフィーリカに拒絶されていた者たちだ。まづ最も他にどんな仕掛けが在るか判らなかつたからあの場の近隣一帯は無差別に全てを凍てつかせたがな」

そんな自身を振り返って軽く苦笑。

「まあ何者か、背後に黒幕の一人や二人は確実に居るだろうという事は分かりきっていたことだし」

でなければあの程度の輩が封魔結界なんて代物、入手、設置などとてもできる様なものでない。

「なにせ狙われていたのはフィーリカのヤツだ。単なる人攫い程度に考える方が愚かしい。最も連中ら、あの小悪党どもとの縁が深かったからといって黒幕と決め付けられるのもまた早計なんだろうけどな」

本当に面倒臭い。

これだから陰謀事は…。

その貴族連中すら捨て駒と出来るものの可能性もある。

力とは、なにも表立ったソレが全てではないのだから。

「なるほど、ソレは確かに…そうでしょうね」

似たような結論に到っていたのか、エスアリアもまた真剣な空気を纏いつつ頷きを返してくる。

「とにかく今回の犠牲者連中に関しては俺的にはどうでもいい。死人に口無し、流石に死んでまでちよっかいを出して来る様な事は無いだろうしな」

「そうはいきません。彼らの関係性について裏を取り、その上で彼らの組織としての根底にまで調査を進めていかねば…少なくともこれ以上狙われないという保障は持ちたいですから」

気楽な言い方をして見せた俺に対して真面目過ぎる回答のエスア

リア。

まあたしかに言われてみればそうかという気持ち。

ただひたすらに向かい来る者たちを蹴散らしていたため思い至らなかった視点だった。

「まあたしかにな。普段そこまで深追いしなかったから気付かなかったぜ」

ばれたら即逃走。

俺的には基本がソレだったからな。

その辺りが放浪者と定住者の感覚的違いと言った所かも。

しかし…

「とは言え、完全に潰しきるのは不可能だぞ」

どれほど早く正確に対処しようと一度洩れた情報を完全に消し去る事は難しい。

情報とはどこからでもどんな形ででも伝わり流れ出してしまふ。

「…まあそうでしょうね」

そう当たり前の様に返答を返してくれている辺りエスアリア自身もまた理解の範疇内の事が故にだろう。

「しかしそれでも…」

「やらないよりは全然マシって考えか」

「ええ、あの子はまだ秘密を持つには幼すぎますから」

だから守ってやらなければならない。

言外にそう言われた気がした。

そしてその感はまだ正しいのだろう。

自分もまたそれを感じていたのだから。

「つと…話が脇に反れちまったな」

何気に湧き上がってきたしんみりとした空気をかき回すように少し大袈裟に話題修正。

正直こういう空気は苦手だ。

「とにかく話を戻すぞ。とりあえず客観的な見解は判った。でだ、そこから何故魔王に行き着いた、話を聞く限りじゃどう見ても繋がりが見えてこないのだが」

多少強引だが一気に話を戻す。

そこまでしなければ拭い切れないソレの様な気がしたから。

「ええそうですね、確かにその通りです。捜査の方も通り魔的犯行

から政権への叛旗にまで、いまだ事に置いての狙いすら特定できずに居る状況ですから」

感じた疑問そのままのコトバに返ってきたのはあつけ無いほどあつさりとした肯定の言葉。

「なっ… ちょっとマテなら魔王の名は？どこからソレが出てきたって言うんだよ」

実はまだ何も判ってませんという感じの答えに、あまりに予想外過ぎて若干慌てる。

「それはとある方からの助言で」

「とある…方？」

そして濁される様に、ポツリと零された第三者的存在。

なにやら少しきな臭さを感じ…

「ええ何故あの方がお知りになられていたのかは判りませ…」

「……………」

「ん…？」

「っ！？」

その叫びは唐突だった。

第12話：唐突過ぎる遭遇

「時は少しさかのぼる」

私は今供の一人も付けずたった一人でこの見知らぬ街を歩いている。

それはアルスト王国第一皇女リリス・アルスト・テストニアとしては立場的にも余り褒められる事ではない。

軽率と見られる行為。

まあ最も私を如何こう出来る存在がそうそう居るとは思えないが。

とは言えソレを知らない周囲の者たちには心配かけるのは判っている。

取り合えず書置きは残してきたけど結局の所無断で抜け出てきたのには変わらないし。

仕方ないとは言えもう少しやり様があったのではと、今更ながら思ってしまう。

とは言え、流石に事この件に関しては他の誰にも知られる訳にはいかない。

この国の者達にしる自国の者達にしる。

本来なら…彼女に話を持ちかけてもアイツの事までは話すべきではなかったのだと思う。

しかし気付けば話さずに済ませない状況と流れに運ばれていた。

（そこはまあ流石としか良い様がないのよね）

本当にしてやられたと言う感じ。

流石はあのサニア魔法学院のトップだった女性。

上に立つ者としての格の違いをまざまざと感じさせられた一幕だった。

しかしあれから二年ようやく掴んだ手掛かりに通じそうな道。

逃したくない。

取りこぼす訳にはいかない。

それに…リィフィアス家なら少しぐらい話しても良いとも思うし。

ソレぐらいは信じても良いと思う。

会話は少したが、その第一印象は少なくとも彼女なら世の世論に目を曇らすことは無いと思えたから。

「まあなんにせよ、まずはフィーリカという子の事かな」

件の事件の当事者にして唯一確定している生き残り。

つい先程、目が覚めたとの連絡を内密に受け取った。

聞きたい事は大局的にはただ一つ。

「今回の件、間違い無くアイツが…ジーニアスが関わってる」

ソレは私にしてみれば疑う余地すらも無い確信的な思考。

あんなふざけた魔法式、アイツ以外に構築できるとは思えない。

認めるのは非常に不愉快で不本意だけど、その能力だけは認めざる得ないのだから。

そんな思考を延々と続けながらやがて目的地、リイフィアス家に戸を叩き、現れた十代中ごろ辺りであろう少女、彼女の娘であるカナリアに招き入れられる事で屋敷へと踏み入れる。

「カナちゃん、お客様誰が来たのー」

間もなくしてひょっこりと顔を出して覗き見てきた女の子が一人。

見た目的には十歳前後だろうか？

ただその仕草、印象的にはもっと幼い感じに見える。

「あっファイ…フィーリカ、先生にお客様みたいですから少しおとなしくしてて下さいね」

「ハ―イ」

印象通りの素直な返事。

このくらいの年頃の子ってそんな仕草ひとつとっても可愛らしい。

と、まあソレはさておき。

「ちょっと行かないで、待ってください」

首を引つ込め、おそらく奥の自室へと戻っていかうとしているであろうその少女、フィーリカちゃんを慌てて呼び止める。

「どうしましたか？」

余りに唐突な行動の為か、少し驚いた様子なカナリア。

フィーリカちゃんもまたその場に足を止め「なに？」と言つ感じに小首を傾げている。

「あの…貴女がフィーリカさんですか？」

「うん、そうだよ」

一応念の為にと問いに実にあつたりと答えてくれるフィーリカちゃん。

カナリアがその明け透けな態度に「フィーちゃん言葉遣い…」とちよつと慌ててるみたいだけど今はまあどうでも良い。

「えっと…ホントに？」

「うんっどうしたの？」

間違いなさそうだ。

なんというか…ココまであっさりと当人に会えてしまつと正直あ
つけなさ過ぎて肩透かし感が否めない。

と言うか普通過ぎて件の事件に巻き込まれた拳句三日も眠り続け
ていた少女にはとても見えない。

「えっと…実は貴女にも少しお話を聞きたいことがありまして…
出来ればココに一緒に居て欲しいのですが、よろしいでしょうか？」

「…私？」

「ええフィーリカ・テストロスさん、貴女にです」

キョトンと首を傾げているフィーリカちゃんに改めて念を押すよ
うに言葉を補強する。

「うんいいよー」

「ちよっ…フィーちゃんお客様に失礼でしょ」

「まあまあ私は気にしませんし、変に畏まりますより私も気が楽で
すから」

そして変わらぬ調子のままに駆け寄ってこようとするフィーリカ

ちゃんを待つ。

流石にそろそろ堪えられなくなった感のカナリアを苦笑交じりに宥めつつ。

「…っ!？」

変化は唐突。

あと数歩という距離まで駆け寄ってきていたフィーリカちゃんが唐突に足を止めたのが始まり。

いきなりの事にカナリア共々僅かな驚きを感じつつフィーリカちゃんを見てみる。

その瞳は信じられないものを見たかのように見開かれ。

更には今にも零れ落ちそうなほどに瞳を涙で潤ませている。

口は微かに、なにか言葉を口に出そうとしているような感じ。

「えっと…どうしたのでしょうか？」

「フィ…フィーちゃん？」

あまりに唐突過ぎる変わり様に駆け寄ることも思いつかない。

「カナリア嬢？」

なんとなく助けを求めたくてカナリアに視線を向けてみたら、カ

ナリアからも私に向けて縋られる様な視線が…。

そして…

その一瞬…

二人の視線がお互いに向けられ、フィーリカちゃんから外された
まさにその時。

その一瞬の空白。

その瞬間。

「おかあさー！ーん！！！」

「えっわきゃー！ーっ！！！」

反応出来ぬままに視界外からの衝撃。

いきなりなことにそのまま押し倒される。

カナリアが口を両手で押さえ、驚きに目を見開いている姿が流れる
視界に沿ってすぐに外れる。

そしてその衝撃を与えてきた存在。

一瞬にして距離をゼロに…

突っ込んできた件の少女、フィーリカちゃんかというと…

「おかあさん！おかあさん！おかあさんーっ！！会いたかったよ寂しかったようわーんおおかあさーん」

私の胸のうちに縋り抱きつき物凄い勢いで叫んでいた。

「なっ なっ ちよっ ちよっ と待つて、フィーリカっちゃん！ かつ かな リアー！！」

双方共にソレは既に叫び。

ハッキリいつて訳判んない。

何が何なのか信じられない。

ホント何なのよこの状況。

というかお母さんてなによ。

私そんな年じゃないっ。

「あっ イタっ… ちよっ とまつて… そこつ まて…」

ホントホント何でも良いから誰でも良いから。

「たーすーけーてーんー」

「えっと……」

ホントコレどういう状況なのだろうか？

例の叫び声らしき声がどうしても気になって、エスアリアを追ってココまで来たのは良いんだけど…。

「えっと…どうしよう？」

あまりの急展開に自分でも頬が引きつっているのが判ってしまう。
助けを求める気持ちで隣を見上げれば相変らずの鉄面皮な表情。

ココまでの状況で最早流石としか言い様がない。

「なんというか…なんでアイツが…」

思わず出してしまう一言。

視線の先にはフィーに突撃食らったのであろう押し倒され、手加減無しにじゃれ付かれている見覚えあり過ぎな女。

リリス・アルスト・テストニア。

「…やはりお知り合いで？」

聞き漏らす事の無いエスアリアの問い。

ソレはアイツがこの場にいる理由を知っているうえでの感じ。

「ああ…って事は今回の…」

「はい、ご想像の通りジーニアスの情報は彼女からです。何でも魔法式に見覚えがあったとか」

エスアリアの言葉内に疑問ではなく確認の意を感じ、そこを付いてみればまさしく思っていたままの答えが。

「あゝあれか」

その言葉内の理由に思わず納得。

確かにあの魔法式は…知っているヤツが見れば一目瞭然だっただろう。

「んでも何でアイツがココに？」

王族であるとは聞いた事があったがそれでもこの国ではなかったはずだ。

ああそれは間違い無い。

「戦後における協定条約の使者として一ヶ月ほど前から滞在されておりましたが」

律儀にも俺の疑問に答えてくれたエスアリアの答えを耳に通しながらももう一つの繋がりに気付き思い至ってもいた。

そうフィーは自分の母親を捜しに飛び出てきたのだ。

この広い世界。

数多にある大小多くの町、集落の中でココにだ。

その理由。

その答えは。

（まったく、確かに会わせてやろうとしてた心当たりが、まさかドンピシャだったとはな）

答えはココまで届いてくるフィーの言葉にて一目瞭然。

つまりる所そういう事。

本能的か、同族ゆえの感応か、はたまた親と子としての縁か。

この地に居るという事を察していたという事なのだろう。

「ところで貴女は彼女…アルスト王国の第一皇女とどういったお知り合いで？」

問われた疑問は…まあ確かに気になるであろう筈のソレ。

世界中でもダントツの悪名高さを持つ『魔王』と大国の姫君の繋がりがりだ。

場合によつて、ただそれだけで世界中を揺るがしかねない大スキヤンダルになりうる。

「アルスト王国…ああそくだその国だったなアイツの故国」

とは言えそつちに関しては俺としてはまだどうでも良い。

権力だ何だと、そんな事は執政者だけが気にしてれば良い。

俺には関係無い。

問題はもう一つの方。

多分だがアイツ自身も隠しているのであろうもうひとつの立場の方。

あの大戦を終結へと導いたとされている英雄の一人。

八英雄『神炎天舞』としてのアイツ自身。

「ところでアイツ自身についてそれ以外になにか聞いているか？」

「いいえ、彼女自身については何も聞いては居ませんし語られてもいません」

「そっか…なるほど、なら今はまだ言えないな。関係もだがアイツ自身の立場もな……その辺察してくれると助かる」

別に庇うつつもりは無い。

面倒事は避けれるなら避けるべきだからだ。

ただ…まあ…

「それでアイツがココにいる理由は？」

話からしてジーニアス関連。

決してフィーに会いにという事は無いだろう。

「情報の交換条件でしたから。事件の手掛かりを教える代わり、この事件唯一の生存者フィーリカとの面会を望まれましたので」

「ああなるほど、つまり…」

俺との関係を聞きに来たという訳か。

動機に思い当たる点が無い訳ではない。

最終的に求めているのはアイツの…アヤの行方だろう。

そしてその手掛かりとしての俺という事か。

「…ではそろそろ下の騒動を収めませんかね」

ある程度の納得は得られた。

そんな俺の内情を察したのかエスアリアが静かに再び階下へと足を進めだす。

そして……

「あなた達、こんな所で一体何時まで何をしているのですか？」

…そんなたった一言で全てが凍りついた。

正面立って向けられたあいつ等だけでなく後ろから追いかけて出していた俺をも含めて。

一瞬にして場の全てを威圧して見せたあの威圧感。

正に絶対零度の視線というヤツか。

多分今のエスアリアの前では石化の魔神メデューサすら裸足で逃げ出したであろうな。

第13話：明かされた秘密（前書き）

ジーニアスの過去のドタバタ。
その欠片かな？

第13話：明かされた秘密

そうして一瞬にして収められた騒動の後。

応接間にてお茶を出されるまでになった。

その何には俺自身もまた含まれている。

正直残るか去るか、一瞬迷ったのは事実。

リリスの目的はあくまでフィーのヤツだし、俺自身アイツとは相性最悪だとは常々思っていることだ。

だがフィーだけだと何を言い出すか正直怖い気持ちも大きい。

で、結局の所その一瞬の迷いによって逃げ出す機を逃し、今こうなってしまった訳である。

「そうつまりこの子のはあの時のフェニックスの子という訳なのね。しかし魂の移行に肉体の譲渡なんて…そんな事まで出来るだなんて」

事件のあらましから俺とフィーの状況についてまで、一通りの説明を終えたところでの感嘆めいた一言。

言葉と共にリリスの視線が隣でずっと自身にくっ付いていたフィーに向けられる。

当の視線を向けられたフィーはだが、自分が褒められたと思ったのか、それとも単に自分を見てもらえたのが嬉しかったのか嬉しそうな笑みのままべったりとリリスに抱き付きだす。

無論ジーニアスの存在はできうる限り誤魔化したし、そこに生じる矛盾もうまく辻褃合わせも出来たと思う。

俺自身の名はジルコニアで押し通した。

本当ならジーニアスの存在そのものを無いものとして語りたくはあったが、流石にフィーを抱えつつチンピラどもから逃げている所を見たという証言を複数用意されていてはそうもいかなかった。

行動は共にしていたが事件後の行方までは判らないと言ってはおいたが…

さてはてどこまで通用するものか。

最後にジーニアスとジルコニアの関係も聞かれるかとは思ったのだが、何故だかソレに関しては一言の言及も無かった。

ただなんというか…ジルコニアの名を名乗っただけでなにか納得気な表情をされていたのが俺的に若干気になっではいる所なのだけだ。

「フィアリスは何もおっしゃりはしていませんのですか？」

心底驚いている感じのリリスに未だ一向に姿を表そうとしない当事者の名を上げてみせる。

それがもう一人の…俺が以前から知っていたフェニックス。

目の前に座るこのリリスと契約せし者。

そしてほぼ間違いなくフィーリカの捜し求めていた母であろう存在である。

「フィアリスなら朝からずっと寝ています。声をかけても起きてくれそうな様子ではなさそうでした」

少し困った様な表情。

ちなみに今、昼時と言うには少し早いがそれでも十分と日の高い時間帯である。

とは言え知っている者からすればコレほどまでに説得力のある理由もない。

フィアリスというフェニックスはそういうヤツなのだ。

フィアリスの名を出した事にいぶかしむ様子は…やはり無い。

おそらくはジーニアス経由で知っていたと思われているのだろう。

「しかし…本当にジーニアスと連絡は？」

「はい、突然の事でしたので後のことはなにも…それに今わたくしはこの様な姿ですし、どうしたら良いものか…」

リリスの言葉内に含まれた合流手段についての問い掛けもそつと

顔を伏せる様にして避ける。

「コレまでもこうした騒動が無かった訳では…むしろ頻繁でしたが…その殆どは全てジーニアスに頼り切っていましたもので」

緊急だったからという言い訳は俺の事がある程度以上知る者に対してはまず通じない。

基本俺とトラブルはセットで付いて回るとというのが周囲の認識である事は俺自身をも気付いている事だからだ。

本当に嫌過ぎる評価だが、否定できない所が更に救い無い。

「そうですね…それは確かに何と言いますか…相変わらずなのです
ね」

「ええ相変わらずなのです」

本当にどうしようもなく悲しいがな。

「ところで同行者はジーニアス一人だったのですか？」

「えっ？」

「他に同行されていた方は？目撃証言もジーニアスとフィーリカ嬢のソレしか取れませんでしたから。ジルコニア様の事も初耳でしたし…ですので他に誰か居りませんでしたでしょうか？」

僅かに…

それでも確実にリリスの声と瞳に力が込められたことが判った。

「例えば…そう、例えば他に女性の方でとか…」

明確な名は出されない。

だがコレこそがおそらくリリスの一番聞きたいであろう本命の問い。

求めているのは間違いなくアイツの事。

「いいえ他の同行者は誰も居りません…フィーリカともこの町ですし、ソレまでもずっと二人だけでの旅路でございましたので」

「えっ…貴女のお姉様とも一緒になかったのですか？」

「私の…姉？ですか？貴女ではなくて？」

しかし出てきたのは想像したソレとは違う名で…

「ええ、ジルコニア様が居るのでしたのでアスタチア様もまた一緒と思っておりましたけど…もしやあの大戦の際に…」

「ちよちよちよと待つ…てください、何故ココでその名前が出てくるのです？」

言葉使いが一瞬素に戻りかけて内心バクバクしつつも、いきなり出てきた予想外の名前に慌てて待ったをかける。

確かにジルコニアというのはアイツの妹から持ってきた名前だが

だからといってただのいち従者を何故こいつが？

「えっ…何故と言われても……夫婦でしたら一緒に居るのは当たり前でしょう？」

キョトン…と、さも当たり前前の事とばかりに斜め上の発言をかましてくれるリリス。

「ちょっとちょっと待って…何夫婦って何言ってるの、
というか何ソレ初耳なんだけど」

唐突過ぎる爆弾発言に自分軽くテンパリ中。

「えっお知りでなかったですか？お二人の婚約はジーニアス以外全員が知っていた事と思っておりましたが」

だからその発言もなんかおかしいでしょうオイッ。

思いつ切りツツコミたいが驚き過ぎて言葉が出ない。

「特にテルルとローレンシムがノリノリで。嬉々として他の主要貴族の反対を潰して回ってましたのですが…アスタチア様からは何も？」

さらにポロポロ普通に出てくるとんでもレベルのビッケネーム。

テルルは相変わらずとしてもローレンシムってお前っ正真正銘グラストロア帝国最高幹部である六将のくせに真面目に戦争してたと違うのかっ！

「だからなんでっ…!？」

あまりの衝撃に、それでも何とか搾り出した万感の思いを込めまくった言葉。

「まあテルルは単純に面白そうだったからでしょうね」

「いや、それは判る。が、なんでローレンシウムまで…」

「そうですね…一言で言ってしまうえば戦力確保と言った感じの思惑だったのではないのでしょうか？ジーニアスという力を完全な形で帝国側で確保したかったと考えていたのだと思いますよ。テルルのお気に入りだったからとは言っても所詮ジーニアス自身は別に帝国に忠誠を誓っていた訳でも雇われていたりしてた訳ではなかったのですし」

「それは…確かにそうだったけどよー…」

「アスタチア様と婚姻を結ばせる事で皇族の末席に据えてしまえば確実に繋ぎ止めておけると考えていたのではないのでしょうか」

「だからって何でアイツとの結婚が……って、ちょっとマテ今なんて言った？」

自分の知らぬ所で進んでいたと思われる謀…と言うか悪ふざけ(?)に困惑と頭痛の渦中に放り込まれてはいたが、流石にその一言にはなんとか反応できた。

と言うか危うく流しかそうになったその言葉を慌てて手繰り寄せ

「ちょっと…チョットマツテクダサイリリスさん」

「…なんででしょうか？」

「皇族の末席つてなに？なんでそうなる？」

それは…ソレは本当に洒落にならない言葉。

と言うか話の繋がりというか関係が全く見えない。

しかしそう思うのは俺だけの様子。

リリスの方はリリスの方で僅かな困惑顔で俺の言葉を受け取っている。

「なんでって…そんなの当たり前ではないですか。低位とは言え彼女も…」

そして彼女にとって当たり前であろうその根拠を語りかけて……

「…貴女何者ですか。少なくとも私の知っているジルコニア姫では無いようですが」

何かに気付いたか本気の警戒色をもって視線を飛ばしてくる。

「なっ…なにを突然」

「何が狙いですか。その名を…低位とは言え旧グラステロア帝国皇族の名を語り何を企んでいるのですか」

「はあっ！？なあ？皇族ツジルコニアが？ってっともしかしてアスタチアもっ」

普通に初耳なんですけど。

「もしかしくともその通りに決まっているではありませんか。テールの従兄弟であり第6位と7位に位置していた正当な王位継承者です。まさかジーニアスを利用してまた何か謀でも…」

「マテマテマテマテ待ってくださいいリリスサマ。ソレ何本当に初耳なんですけど」

物凄い勢いで暴走と言うか、オレ的に非常に非常にヤバイ方向に思考がぶっ飛びそうになっているのを慌てて止めにかかる。

「なにを今更っ！当人なら知らない方がおかしい事っ今更どう言い逃れする気ですかっ」

「落ちて着け落ちて着いてホント落ちて着いて聞イテッテバホントにチョット。そもそも偽者演じるならむしろ知ってるだろーがっ。てかホント初耳なんだって」

思い振り返ってみてもそんな言葉聞いた事が無い。

決して短くない期間接していてそんな仕草を垣間見た事すらない。

「と言うか普通に洗濯してたぞ掃除とか料理とか、っーか皇族？従者じゃなかったのか」

アイツに対しての印象と言えば…

テキパキと走り回ってあれやこれや身の回りのことをしてくれている姿。

「貴族なんて一体何を考えているのか理解できませんよね」なんて他の宮仕えの者たちと楽しそうに話している姿。

それがあまりに普通過ぎて、いきなりそんなコト言われても微塵も想像できない。

「そんな訳無いじゃないですかっ！あと家事全般は彼女の趣味ですっ！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」本当に何者ですか貴女は…偽者、騙りにしては確かにあまりに彼女の事を知らな過ぎる。かと言って偶然と言うにはその名はある意味特殊なものであるそうなのですよ」

テンションを上げるだけ上げての睨み合いの末、ようやく勢いも治まったか、盛大なため息交じりの言葉が吐かれる。

「そんなコトお…私が知りたいぐらいですよ」

そんなリリスに合わせるようにして俺もまた盛大に肩を落とす。

本当に何なんだよあの国…と言つかテルルの血筋は。

「…………正直に答えてください」

数度の呼吸の末、完全に落ち着きを取り戻したりリスが真剣な眼差しでこちらを射抜いてくる。

「その名…ジルコニアという名は偽名、貴女の本当の名ではありませんね」

「……………」

「……………」

「……ええ、確かにその通りです」

流石にココまで言われて本名と言い切るコトは…出来ない。

それだけのモノをその視線は孕んでいた。

「では貴女の本当の名は？一体どこのどちら様なのですか？」

言葉は続く。

目は反らせられない。

本当のコトは……流石にコイツ相手でも言えない、言いたくない。

立場的にもそうだが、何よりもこんな状況に陥っている事を知人

知り合いに知られるのは嫌過ぎる。

シリアスなとか場の空気とかそんなもの以上に恥ずかしすぎる。

「……………」

「……………」

かと言って下手な偽名は見抜かれかねない。

根拠は無いが向けられる視線の強さにそう思わせるだけの何かが確かにある。

エスアリアやカナリアに動きは感じられない。

静観しているのか話についてこれていないのか。

援護は……流石に無茶な願いだな。

「……………」

「…どうしましたか？」

「あ…その…わっ私は…」

ヤバイヤバイ本当に何も思いつかない。

どうするっどうすればいい。

「…その…」

「ふう……いいです、質問を変えましょう。その名、ジルコニアという名は誰に……いや、ジーニアスが用意したものですね」

確信の込められた問い。

「……はい」

頷くしか出来ない。

根拠は……まさに今先程までの会話だろう。

「つまりジーニアスと行動を共にしていた。それも短期的な期間ではなく長期的な時間を」

「………」

バレるか。

否、まだ話し振りは別人と別けてのそれ。

「とは言え帝国関係者ではない。そうであるならジーニアスの名にすぐさま気付くはず」

「………」

「貴女は彼といつから行動を共に？」

「………」

「どういった関係なのですか？」

「……」

「多くは聞きません。無理にも聞こうとは思いません。貴女が話しても良いと思える事だけでもかまいませんから」

「……」

「やっと見つけた糸口なのです…姉さまに繋がるかもしれない…」

「………」

「だから…」

僅かに洩れ聞こえたリリースの本音。

判ってはいたが、やっぱりコイツもアヤを搜して…

「お願いします…」

第14話：捜し人

真剣に…

自身の思いを全て押し込め…

頭を下げるその姿。

コイツの素の一面を知る者からしてみれば少タイメージからずれるその姿。

しかし確かにコイツの本質ともいえる一途さでもある。

そうしてそこまで思われている者。

そうその姿がどうしようもないくらいアイツの事を考えさせる。

アヤ。

コイツが…そして俺もがこの2年ずっと捜し続けていた女。

俺とはまた対極に位置する伝説。

世界を救ったとされる8人の英雄の一人にしてその要であったと言われている女性。

八英雄『聖母』アヤ。

世間一般には最終決戦の地にて死亡したとされている。

しかしそんな事、アイツを知る者からしてみれば信じられるはずが無い。

通説や逸話とは違った形だったが確かにあの時アイツの状況からその生存はありえないと断言してもいい様なソレ。

だが死体を見た訳じゃない。

最後の瞬間を目にした訳でもない。

ただそれ以降姿を表さなくなった、ただそれだけ。

しかしそれだけでも俺たちにしてみれば十分すぎるほどの理由。

奇跡でもなければ…

間違いなくそういう状況だったが、現実としての死が目の前になればそれだけで良い。

奇跡が起きない限り…

そう言える状況なら俺たちにしてみれば生存は十分過ぎるほどの可能性。

何せアイツはその奇跡を起すヤツだったのだから。

それも頻繁に。

俺はそう考えて。

そして目の前のコイツもまた同じ考えだったのだろう。

先程の漏れ出た本音が…

今のこの姿、行動が…

その事を明確に表している。

しかし…

「…すみません…あの…その貴女の捜し人の事はジーニアスもまた捜していましたか…」

言葉に反応してか、顔を上げたりリスに向けてゆっくりと首を横に振る。

そしてソレは紛れも無い事実。

天下一の放浪娘、テルルとの付き合いで捜し人に関しての手段と能力は世界中の何者にも負けぬと確信できている俺だがその行方は…手掛かりす

らも見つけられていないのだから。

「……………そう…ですか…」

「……………」

「……………」

「……………」

僅かにだが落胆に沈んだ声。

リリースもまたその件に関しての俺の能力の高さを知っているだけに期待も大きかったのだろう。

もしかしたら…と。

ただまあそこに絶望や諦めの感情が見えてこないのはある意味流石だと思うがな。

「それで…結局の所貴女は何者なのですか？」

気を取り成す為か軽く呼吸を整えてから再びまっすぐな視線。

（ちっ誤魔化せなかったか）

再び戻ってきた問いに内心舌打ちをする。

本命の話題を一足飛びで答える事でその問答を素っ飛ばしたかったのだが…

そううまくいかなかった様子。

「ここまで来てしまうと何か…本当に何でも良いから答えなければという空気に…」

「えっ……と…その…私昔の記憶が……イエスミマセン違いますから」

とっさに出てきたのは昔アヤが使った言い訳。

なのだがあまりの嘘っぱさでバカらしさから瞬時に取り消し否定の言葉を吐いた。

こんなの普通信じる方が馬鹿だ。

実際当時そんな言い訳を信じた様なやつは誰一人としていなかった。

無論目の前のリリースも当然その内の一人だた訳だし。

信じるはずが…

「まさか…すみません随分と不躰な事を何度も…」

信じ…

「知らぬ事だったとは言えまことに申し訳ありませんでした」

信…じちゃってるよ、何故か。

状況的には非常に都合の良い事なのだがあまりの事に思考がうまく着いて行ってくれない。

「しかしそうするとジーニアスが名を用意した理由も…」

「いや…でもそれでも自分の知人の名前をそのまま使うというのも…」

「もしかして……いや、そんな事……でもそう考えるといろいろ……」

そうしてそんな俺を置いてリリスは一人ブツブツとなにやら思考を言葉に漏らしており……

「あのっ！……貴女本当に記憶を？本当の名前も何も覚えて……いないのですか？」

ズズイッと身を乗り出してくるリリスに退きながら、勢いに圧されるままにコクコクと頷いてしまっている自分。

「なるほど……そう考えれば全てが……でもそんな……いや、考えられない事でも……となるとアスタチアは……」

とうとう一人思考の底にドップリと浸かってしまっているリリス。

どうにかならないかと助けを求めるように隣に視線を向ければ困った様な溜息を吐くエスアリアとその膝で気持ち良さそうに寝息を立てているカナリアの姿。

「貴女は……まあ今回の場合主にリリス様の方かもしれませんが、もう少し発言に気を付けるべきですよ」

そんな俺の視線に気付いてか、小声でそつと忠告の言葉。

「隣で聞いてまして内心どれ程に驚かされ冷や汗をかかされた事が。幸い早々にカナリアを眠りの裡に鎮めましたので良かったですが」

続けられたそんな小言を聞きつつ思い返してみれば……

軽く青褪めれるくらいにヤバイ内容でしたホントマジで。

普通に事情を知らない第三者に聞かれてたら速攻反乱者、と言っ
か帝国残党の裏切り者：内通者と捕らえられても文句の言えない言
葉の数々だ。

「まあその辺りの詳しい事はあとでゆつくりと聞かせていただきま
すから。よろしいですね」

「…はい」

拒否権は普通に見当たらなかった。

「貴女も随分と辛い道を歩まれてきた様ですね」

そんな所、唐突にかけられた神妙な語り声。

向けられたその言葉に意識を再びリリスの方へと向ける。

ようやく思考の迷路から抜け出してこれた感じのリリス。

その表情は少し寂しげな様子で穏やかで優しげな言葉を紡いでく
れる。

リリスの中でどんな結論に達したのかはいまいち判りかねる所が
あるが、まあ悪い事態にはならなかった様子で一先ずの安堵と言っ
た感じが。

「えっと……その…すみません」

とは言ったもののリリースがどういった結論に達したのか判らない
以上どう答えて良いものか判断に迷うのも事実。

「クスツ何を謝っているのですか、そんな必要など無いのに。
むしろ謝らねばならないのは私の方なのですしね」

わずかに肩の力を抜いてリリースが「すみませんでした」と頭を下
げる。

「知らなかったとは言え随分と無遠慮にジルコニア様の心の内にま
で足を踏み入れてしましまして…どうにも私自身知らぬ内に随分と
焦っていたようです」

「まだまだ未熟みたいですね」と自嘲気味の笑み。

「しかし…ジーニアスにも掴めないとすると…この先どうしたもの
か」

そしてそのままの雰囲気にての思案の言葉。

よく知らぬ者から見れば軽い呟き程度の言葉。

しかし俺から見ればその内情の憤りを抑えきれずにいるのは一目
瞭然。

そしてその理由も…また同じく。

ジーニアスに無理だった事を果たして自分に成せるのだろうか。

そんな思いに駆られているのだろう。

リリスもまた真正銘の八英雄の一人だ、互いの能力と実力の正確な見極めは当たり前前のようにできる。

故にこそその判断であろう。

事実、捜し人に関しては俺どころかテルルやアヤにすら劣る。

まあ戦いにはまったく関係の無い技能の上に特性や性格の関係上仕方ない事ではあるがな。

とは言え…

「どうするも何もその為に国に帰られたのではないですか」

…それはあくまでリリス個人の技能の問題。

「彼女を捜す為の手と目は多いに超した事はありませんものね」

ただ個人としてではない、一国というバックを持つ王族としての力はまた別物なのだから。

少なくともこの家出娘が実家に帰っている理由などそれ以外に俺には思い浮かばなかった。

「そうではありませんか？リリス・アルスト・テストニア様」

「ええ…そうですね、その通りでした。ハハッ本当に何を言っているのか、あんなバカに頼ろうだなんて。私に出来る事で、私にしか

出来ない方法で姉さまを見つけ出そうとしていたはずなのにね」

一部不穏当な言葉は混じっていたがソレが逆にコイツらしい。

その仕草や表情はともかくな。

「本当にこの度は突然の申し出と訪問、多くの我俣を聞いていただきありがとうございます」

その後しばしの談笑ののち、穏やかな笑みと共にリリースが頭を下げる。

「こちらこそ随分と面白いお話を聞かせていただきましたし、けっして無益な時ではありませんでしたよ」

「おかあさん帰っちゃうの？」

穏やかに応じるエスアリアに寂しそうなフィー。

「ごめんね、私も黙って抜け出してきたからあんまり長い時間は無理なのよ」

「うゝもつと一緒に居たい」

「コラ、あんまり無理を言うものじゃありませんよ」

「本当にゴメンね、フィアリスが起きてれば彼女だけでも残しているのだけど」

本心から申し訳ないといった感じのリリースの言葉。

フィアリスのヤツは結局最後まで起き出して来なかった。

なんというかことんまでらし過ぎる。

とは言え、確かにコレで終わりとはフィーのことを思うとあまりに寂しいか。

「あの…」

だから小さく手を上げ言葉を挟む。

「流石にずっとという訳にはいかないでしょうけどしばらくフィーの事預かってもらえないでしょうか？」

「えっ」

「ジージ？」

「私とフィーの関係も変則的ではありますが契約状態にあります。ですからずっとと言う訳にはいかないでしょうが…それでもこの国に滞在されている間ぐらいは…ダメでしょうか？」

「…っ！ジージ良いのっ」

そう、リリスがしようとした事は俺たちの方でも可能なのだ。

時間や距離の制約はあるものの46時中共にしなければならいと言っ事は無いであろう。

確かに契約直後である以上、不安定さはあるだろうが数時間程度なら大丈夫と思う。

仮に俺の見通しが甘かったとしてもその辺に精通しているであろうリリスとフィアリスがフィーと共にいれば最悪の事態にだけはなるまい。

「もつともこちらの我侭ですので無理にとは言えませんが」

「それは……大丈夫です問題ありません。けど……フィーちゃんは良いの？」

「うんっおかあさんといたい」

「……ふう、まったくんだ無理を……すみませんテストニア姫」

「いえっそんな頭を上げてくださいリィフィアス様。元はと言えば私がこの子の母親を連れ出してしまったのが原因みたいなものなのですし」

「ではお願いします」

「はい任されました」

最後に俺とリリスが頭を下げあい、事は一応の決着。

「あっあとジルコニア様、コレなのですがジーニアスに渡しておいて貰えないでしょうか。今後何時時間を取れるかわかりませんし」

最後、そう思い出したかのように取り出したのは一通の手紙。

「シス・カラミティ様からの最後の手紙です」

第15話：ペンフレンド

その名前を聞いた瞬間、身体が…心がビクンと反応した。

「あら、その様子だと聞かされていたみたいですね」

リリスがそんな俺の反応に気持ち目尻を下げた様な気がした。

「おそらくあの最後の時の少し前に綴られたものだと思います。スイ様が見つけられてジーニアスにと預かっていたものなのですよ」

「シスの…」

そつと差し出された手紙を意識の外側で感じながらも、それでも自身の手は差し出された手紙を受け取っていた。

「そう…おそらくですけどね、あの最後の戦いの直前くらいじゃないでしょうか？机に残されていたのをスイ様が見つけられて…で、多分誰よりもすぐにかち合うでしょうって私に渡されたの……まあちよつと入れ違いにはなっちゃんしましたけどね」

軽く笑いながら「お願いします」と手紙から手を離す。

「本当なら預けられた私が直接と言うのが筋なのですが…またすれ違う可能性もあるでしょうし、なら確実に迎えに来てもらえるジルコニア様にお願ひした方がより早く確実にジーニアスの手に届けられるでしょうから」

続けられた言葉に込められた思いは俺から見ても判るぐらいの信

頼。

例えどんな状態であつても。

今こうして…姿形を完全に別人のソレへと変えてしまっている現状であつても。

俺なら必ず見つけ、迎えに来ると…けっして見つけられなかったり捜さないことはないであろうし言う確信。

例え本人にそういう意図の自覚がなくとも…なんとなくだけそんな風に聞こえた。

最も間接的にはあつても、目の前でそんな言葉をぶつけられるのは無茶苦茶に照れ臭いのだけど。

特に普段が普段のコイツからだ希少性も含めて更に居心地が悪くなる。

「わっ…わかりました………です、ハイ」

そんな心地のせいか自分の顔が今どうなっているか知るのも見られるのも怖い…というか恥ずかしい。

絶対にマトモじゃない。

さつきからずっと無表情を装つとしてるけど、うまくなんて絶対出来ている筈が無い。

うんソレは確実。

何か賭けたってかまわなくらいな確信が持てる。

本当にひじょーに遺憾ながら。

「クスクスッ…では改めてお願いします、頼みましたよ」

そんなに今の俺が面白いのか、それとも他に何かあるのか。

ただ笑いを噛み殺すような感じのままその身を翻す。

そうして懐かしい悪友との再会は一端の終わりを見せた。

最もリリスは気付いていなかっただろうけどな。

「にしても…」

（…シスからの手紙か）

手元に残された一通の手紙に自然と目元が緩む。

かつては何通も…ほとんど連日の様に交わしあった手紙のやり取り。

そしてもう二度と交わされる事のなくなった手紙。

その最後の一通か…

（まっとうせ何時もの惚気万歳の手紙なんだろうけどな）

まるで昨日の事のように溢れ出て来る当時の事を思い返ししながら手にした手紙を見つめる。

「しかし本当に貴女は…いえ、ジーニアスとは随分と不可解な交友関係を持っていますのね」

そんな思い出に浸っている俺にエスアリアからの苦笑交じりの言葉。

「アルスト王国の姫君に加えさらには聖人ですか……そういえばジーニアスによって襲撃誘拐された聖人の名が…」

「確かに世間一般の話じゃそうなってるわな」

（毎度の事ながら事実からは激しくぶっ飛んでるが）

最早諦めの笑みと共にエスアリアの推察を肯定する。

そう、ジーニアスの関わる逸話の中でも比較的有名な話。

巡礼途中の聖人シスを攫い。

その心を邪悪に堕し、神より与えられしその特異なその能力を己が欲望のままに振るわせようと企むものの、後に八英雄と呼ばれる事となる『聖母』と『神炎天舞』の二人によって阻まれた。

と、世間一般には英雄譚の一節として語られたりしている。

まあ最も実際には…

襲撃されている現場に偶然居合わせた俺がほとんど成り行きに吞まれる形で襲撃者を蹴散らし、結果助ける形となっちまったんだが。ただ、その時点で既に厄介な呪縛をかけられていた様子。

まあ助けたついでだしと思い、その解呪の為グラステアに一旦連れ帰った訳だが。

…まあ一種の気紛れだな。

その後この行動を何度も…何十度も後悔する事となったのだが。

ちなみに英雄二人はこの件には関わっていなかったはずだ。

少なくとも俺は知らないし、もう片方の当事者だった当人たちにも聞いた事があるが話の出所はサッパリだった。

まあとは言ってもそんな些細な事は今更気にするまでも無い。

何時もの事だし慣れたもんだ。

非常に嘆かわしいが。

それにその後の…解呪までのグラステアでの日々に起きた騒動に比べたら本当にささやか過ぎるトラブルだったのだから。

…あれは本っ当にキツかった。

なんと言つか…思い返しただけでいまだ頭が痛くなってくるぐらい。

まさか内乱直前にまでいくとは流石に予想も出来なかったし。

恋に暴走した堅物の…なんとも凄まじかった事か。

「まあなんと云うか…そのときの縁で色々とな。文通友達と云うかそんな感じに落ち着いてたわけなんだよ」

元々が超が付くほどの箱入り娘だったシスにとって外の世界と云うのはまさに憧憬的。

その上友好関係も閉鎖的な上神聖視されていたせいで壊滅的。

その結果、第一印象と云うか出会いのせいもあつて思いっきり懐かれた。

とは言つてもお互いの立場もあつて一緒になど居れないし出向く訳にもいかなかった。

「まあ文通程度のやり取りなら世間どころか間者の類の目も誤魔化すぐらいなんて事はなかったしな」

何せこちらにはテルルがいるのだ。

かなり渋つてはいたがそれでも協力はしてくれたから。

「まあ大体一年と少しくらいの間だったかな」

思い返してみればコレもなかなか悪くない思い出だ。

切欠はともかくな。

そしてそれ故に最後と言つ言葉に寂しさと悲しみが込み上げられる。

「しかしその最後と言つのは…」

「まあそういう事だ。何と言つか…最後の戦の時にな」

その場には立っていらなかったが話には聞いている。

暴走状態の異界の門を塞ぐ為の人身御供として世界樹に魂を同化させた。

世間一般では『聖母』が成したとされている偉業。

「まっなんにしてもそんな面白い話じゃねえわな」

当人の内心はともかく残されたものからしてみればあまり変わりが無い。

たとえどの様な『予言』があろうと今を生きるだけしかない俺たちにしてみれば栓無い事。

（まっ最もスイ達はそう考えなかったみたいだけどな）

なんとなく思い返すはあの地に残ったあいつらの顔か。

「あとリリスの事だが俺はまあ喋らないからな。知りたかったらあいつからにしとけ」

話は終わりとばかりに俺もまた席を立つ。

俺自身のことに関しては恩も感じているが、流石にコレとソレは別問題と言う所だろうしな。

そして扉を出ていく最後まで…背後からの言葉は無かった。

第15話：ペンフレンド（後書き）

ちなみに【恋に暴走した堅物】 〃 【聖人シス】ではなかったりです。
過去のダイジェストはココまで、かなり飛ばし気味で説明不足12
0%でしょうがコレは後々の伏線と言う事で流していただければ嬉
しいかな〜…っと。

次回からようやく時計が動き出す…予定？

第16話：日常／／朝の一時（前書き）

リアルが落ち着いてようやく復帰できました。

まあしばらくの間は執筆のリズムと調子を取り戻すの間スロ
ーペースが続くとは思いますが暖かく見守っていてくださると嬉し
いです（ペコリ）。

第16話：日常／朝の一時

「へーここが…」

扉を抜け、まず出た言葉は感嘆のソレ。

「流石と言っべきか何と言うか…よくコレだけの場を用意できたもんだな」

ただ見るだけならなんて事無い…やや閑散とした雰囲気の中庭。

しかし魔法使いとしての視点から見ればまさに万能とも言える術式場。

どの属性に偏る事もなく、全てが均一に世界を覆っている。

普通ならこうは無い。

たとえそれが一流を名乗る魔法使いによるものだったとしても。

本来、何ものにおいても属性の向き不向きがあり、その効果も不動ではなる常に揺らぎの中にあるものなのだ。

どれ程意識的にそう仕向けてもそう簡単には覆せない法則。

故に通常は行使する属性に合わせて複数の場を用意するもの。

しかしこの場は…

まさに絶妙と言えるバランスの元安定した場。

その特性故にか、場の恩恵はほぼ無いに等しいが並程度以下の使い手の練習場としてはむしろ最適であるとさえ言えるかもしれない。

リイファイアス家の中庭。

それがこの場所

カナリアの修練について来た訳なのだが。

これはなかなか。

ただ足を踏み入れただけでもどれだけの価値があるか。

「コラッダメでしょ。そんな乱暴な言葉遣いして」

そんな感動真っ只中の俺の目の前に、ピシリッと指が突きつけられる。

「「もんだな」なんてダメですよ。ジルちゃんは女の子なんですから、そんな男の子みたいな言葉遣いしちゃいけません」

「ほら言い直して」とまで言われ、寸前までの感動が尽く瓦解していく。

完全にかき乱された空気に、内心にて盛大な溜息。

「……………用意できたものですね」

最早言い返す気すら起こせなかった。

本来、敬語を使う事に抵抗は無い。

好き勝手やっていたとは言え、それなりに長い時を王家のお膝元で過ごしていたのだ。

この程度いやでもすぐに身に付く。

…そう敬語に関して抵抗は無い。

ただ…同じような話し言葉遣いでも、女性らしい話し方をと指摘されると。

途端、羞恥心に身を悶えさせたくなる。

さっきなんか鳥肌が立ったぞ。

まあそんな俺の内心など知る事も無いカナリアは満足そうにウンウンと頷いていて。

その上「よく出来ました」などと頭まで撫でて来る。

いつの間にかすっかり姉気取りだ。

抵抗は…

無理。

と言うか子供を泣かせたり困らせたりして喜ぶ趣味は無い。

「ではそこでおとなしく見ててくださいね」

そんな俺の態度に気を良くしたのか、見た感じかなり上機嫌な様子で場の中央に足を進めていく。

本当に嬉しそうに。

何と言うかそういう年頃なのだろう。

まあ判らなくも無いが…

思い浮かべるはテルルに懷かれ始めた頃の自分自身が。

まさか自分が逆の立場になるとは欠片ほども思わなかったが。

「まったくなんつー人生だってんだよ」

思わず洩れ出る苦笑。

何と言うか波乱万丈と言う言葉に物凄く親しみを受ける。

まあ何時もの事と言えばそのとおりで…

どうしようも否定できないのが涙を誘う。

そうこうして鬱になっている間にすっかり準備を整え終わっていたのか、カナリアが周囲に魔力の流れを生み始める。

「ともかく、今日の所はどの程度かお手並み拝見とさせてもらおうかな」

気持ち視線に力を込めて。

リイフィア家当主の直弟子を見据える。

（あんまり期待し過ぎる訳にもいかんだろうけど）

どれ程の師がついていようが初心の一步は変わらない。

そして今朝の感じからしてカナリアの居る場所はまさしくその一步目に違いないであろうだから。

（成長の度合いは今後に期待、今は……資質の見極めかな）

魔力の流れの纏まりと指向性を目と肌で感じる。

魔法を使うに当たっての始めの一步とも言える行使の基本。

なのだが…。

（あいつ等には全く不要で無意味な段階だったんだよね）

なんとなくかつての情景が思い出される。

騒乱が続いていた世にあつて。

その真っ只中に居たにもかかわらず。

それでもバカやって騒いでいたあの時。

魔法の指南してやってた二人の姿が…目の前で立っているカナリアに被る。

そう感じると…こういうのも悪くないかも。

なんて思ってしまう。

堅苦しいのは嫌いだが、好き勝手に良いのなら教鞭を振るうのも悪くはないかもしれない。

エスアリアの頼みとか狙いとかは関係なくても。

何気に…掌の上で転がされている様な気もするが、感じてしまえたものはどうしようもない。

（まあいいか、正直言ってこういうのもわるくないってのはホントだしな）

もう一度心の内で苦笑交じりの溜息。

あの時も…またあの時だってほとんど成り行き一直線だった様な気もするし。

俺自身結構楽しんだと思う。

後悔なんて、指摘されるまで考え事として挙がる事すらなかった。

例えソレが俺自身に向けられた牙となったその時となっても。

「まっこのままエスアリアの思い通りになってのが少しばかり面白いけどな」

なんとなしに思い返されるは今朝的一幕。

時はわずかに数時間ほど前のこと。

朝食後のお茶の席での事。

それは俺が目覚めてから数日の時が過ぎていた日の事だった。

「先生今日もお出かけですか？」

カナリアの問いに「ええ」と頷くエスアリア。

まだまだ例の事件関連で当分忙しいと言っ話だ。

何と言っか…

真相まで辿り着きながら良く付き合えるものだと思っ。

俺なら確実に逃げ出している。

立場？

気にするかそんなもん。

「ところでどうですか？練習の方は」

「うっ…えっと……その、頑張ってはいるんですけど…」

思案の内に微妙に進んでいた会話。

どうにも修練の具合を聞かれたみたいだが、カナリアの反応からしてどうにも芳しくは無い様子。

「そうですか…私も付き合えれば何かしら助言も出来たでしょうが…ごめんなさいね」

「いえっそんな、先生もお忙しいですし。コレぐらい私一人でも大丈夫です。すぐ上達して見せますから先生はお仕事の方を頑張ってくださいですよ」

「ふふっありがとうカナリア」

何と言つか微笑ましいなコレは。

感覚的に大きく感じてしまうティーカップを弄びながらそんな二人のやり取りに和む。

思い返せば近しい連中は尽く騒ぎを起すような奴等ばかり。

だからこそ久しいこの感じは凄く貴重な気がした。

「でもそうですね…一人でよりも他者が居てこそ気付ける事もあるでしょう。ジルコニア、身体の方が大丈夫なようでしたら力ナリアの手伝いをお願いしたいのですがよろしいでしょうか？」

傍観を決め込んでいた所にいきなりの唐突なお願い。

飛び出しかけた軽い動揺を悟られる前に蹴り飛ばしつつ、少々考えてみようとし…

その必要性の無さにバカらしくなった。

と言うか、考えるまでも無い。

「…はいソレぐらいこちらから願いたいぐらいです」

何せ用事も予定もすべからくして何も無い。

潰せる暇があるなら喜んで飛びつくべきだろう。

「えっジルちゃんも？…もしかしてジルちゃんも魔法使いの卵なのですか？フィーちゃんと一緒に火とかもう出せちゃったりとかするのですかっ」

「火？」

「え…もしかして知りませんでした？フィーちゃん凄く簡単に出してしまえるのですよ」

「いや、まあソレは知ってたけど…」

フィーの事よりもむしろカナリアの驚き声に反応しての言葉だったのだが。

（まあこの年の子に炎の質の見極めをして見せろと言つのも無茶だしな）

そんな可愛らしい勘違いの対応は微笑ましいと素直に思える。

実際の所フィーが出したと言つ火はただの火ではなかったのだらう。

フィー：フェニックスにとつては自分自身といつても然程違いは無いであろつ神炎を出して見せたのだと思つ。

（あの時も考えなしに出してくれた訳だしな）

思い浮かぶはこの身となつて初めて目を覚ました夜の事。

「でもその後先生にすつごく怒られて、この中庭以外の場所を出しちゃダメつて泣きながら約束させられていたんですよ」

身振り手振りその光景がいかに凄かったものだったかと教えてくれるカナリアには悪いがその『すつごく怒っているエスアリア』と言つのがまるきり想像できない。

どこまでいつてもひたすらに鉄仮面のイメージしか浮かんでこない。

（……いや、ソレはそれで中々か？）

もしかしたらそっちの方が恐ろしいかも？

結局の所曖昧過ぎて印象もうまく固まらない。

（まっそのうち見る事もあるだろう）

と言うかそもそもからしてロクな話題でもない。

「まあ怒った先生が怖いのは十分判ったからな」

会話の流れに一区切りを打つ言い様に加え、話の軌道を少し前のソレへと強引に戻す。

「それで俺の事だが魔法の知識だけは十分だぞ。最も…本当に今は知識だけだな」

軽く笑みを浮かべながら、それでも割かし真剣な調子でテーブルの下の手を意識を集中させてみる。

結果は…まあ予想通り。

「やはり無理でしたか？」

まるで全てを判った上での様なタイミングでのエスアリアの問いかけ。

「ああ、まったく汲み取れねえ」

以前なら意識など向ける事無くごく当たり前として在った感覚。

自身の内なる魔力そのもの。

そして裡より外へと引き出す力の流れ。

しかし今はソレが感じられない。

ただ全くという訳ではない。

それでも依然とは決定的に違う感応。

分厚い壁の向こうの様な…

見えない。

触れられない。

隔たりが大きい。

そんなイメージ。

予想はしていた。

理由も、理屈も自分の知識で十二分に説明も理解もできている事だから。

「今の俺は…まあ魔法使いとしては終わっちまってるって事さ」

ただ一人置いてかれている感じのカナリアに端的な答えを言うってやるが、余計に首を傾げられた。

「そのような言い様では流石に判りませんよ。ね、カナリア」

「あついえ、その……すみません」

「謝る必要はありません。あの言い様で判れと言う方が無茶な話なのですから」

話に着いて行けない事に萎縮するカナリアを擁護するエスアリア。

なんとなくだが言葉の棘がコッチに突き刺さってきてる感じで非常に居た堪れない。

「そうですね、良い機会ですし少し講釈をいたしましょう」

「はい、よろしくお願いします」

まあそんな感じで朝のお茶会は一転して座学の講釈へと移り変わった。

第17話：エスアリアの魔法講座その1（前書き）

今回はほとんど説明話。

第17話：エスアリアの魔法講座その1

「ではカナリア、まず始めに質問ですが魔法使いにとって絶対に必要不可欠な才能とは何か判りますか？」

「えっ…えっとそれは…魔力のコントロールですか？」

少し自信無さげな答え。

その答えも確かに間違っでは居ない。

幾千、幾万とも在ると言える数多の魔法体系。

それらの根本は魔力と分類される力の行使であり、操る事なのだから。

しかし今この問いに対して言えば…

「いいえ、ソレは正解とは言えません。確かにソレも必須に近い技能ですが絶対と言う訳ではありません」

そう、魔力操作を必要としないモノも在る以上正解とはいえなくなる。

まあもつともソレは魔法と言って良いのか議論が分かれそうな例外的なモノだな。

「正解は魔力を引き出す才能。魔力の無い者には魔法も魔法具も使えませんからね」

「えっ…でもそんな事…」

「そうですね、魔力とはその大きさに違いがあっても誰もが持つもの。そう言いたいのでしょうか？ですがソレは正しい認識ではありません。現に『魔力無し』と言う言葉もありますしね」

「『魔力無し』…ですか？」

どうやらカナリアには初めて聞く言葉らしい。

まあそれも当然か。

なにせ事例が少ない上に興味を持つ者は更に少ない。

魔法を特別視する者たちの中にある種の侮称として使っている者がいるくらい。

まあエスアリアにとっては単なる知識の一角程度でそれ以上でもそれ以下でも無いであろうが。

「ええ魔力を全く発現出来ぬ者を総じてそう呼んでいるのです。ところでカナリアは魔力とは一体何なのか調べた事がありますか？」

「えっとその…すみません」

再度の問いかけに俯き気味のカナリア。

内心は期待に込えられていないのかとか、無知を責められているとか、そんな感じかもしれない。

「いえ、良いですよそう気にせずとも。教える機会もありますんでしたし普通では気にする者も少ない項目でしょうですからね。まあいつか機会があれば調べてみては？　なかなか奥深く面白い世界ですか
ら」

そんなカナリアの様子に気にする必要は無いとエスアリア。

傍目に凄く微笑ましく映る親子な風景。

ただ傍目から見ているからこそなんとなく判るが…

伝わってないぞとエスアリアにはちよつと言いたいかな。

(…まあフォローは後でも良いか)

エスアリアの眼差しに全く気づく事無く落ち込みつ放しのカナリアの様子に、それでも話の腰を今あえてココで折る必要も無いだろうと静観を決め込む。

とは言ってもその空気もそう長くは続かなかったが…

「今日の所はジルコニアの…『魔力無し』についてですね。では始めに魔力とは一体何なのか、どこから生まれ出る力なのかになります…」

エスアリアの語り調が説明…否、むしろ講義と称すべきか。

そんな感じの独特の硬さを感じさせるようになる。

「……………」

そんな空気をカナリアもまた感じ取ったのか、どことなく沈んだ感じのうつ向き気味だった顔を上げ、真っ直ぐな眼差しにての聞く態度へとその身と心を入れ替えさせていた。

「魔力とは何なのか？ その根本的な答えを表すとするなら生命力……魂そのものの持つ力と言う答えが最も正解に近いでしょう。それゆえに生在る全ての者は魔力をその身に宿しておるとされ、例外的存在として

生なき生物であるアンデッドが居るくらいでしょうか」

「アンデッドも生物：なのですか？」

エスアリアの語りに違和感でも感じたのか、カナリアは微妙な表情にて語られた言葉をそのまま口でなぞるように呟いてみている。

「まあなんだ、生物と生命はこの際でははっきりと別物となるんだ。生物とは確固たる意思を持ち己が考えの元行動を起せるものの事を言うんだ。まあアンデッドの中でも極一部のそれこそ最高位に位置するよ

うな高位存在がそこに含まれる程度だけだな」

「ええその通りですジルコニア。そして生命とは魂を宿した命を持つものの総称となります。魂か命のどちらかを亡くし、結果どちらかのみで現世へと干渉し続ける存在がアンデッドと呼ばれるゆえにこちらに

は該当しません」

そう俺の説明をエスアリアが引き継いで最後まで語りきるが、はたしてカナリアに理解できたか。

この議題に関しては今もまだ異を唱えている学者も多く居るほどには確固とした理論でもないのだ。

「とは言え、今はまだそれほど深く考える必要もないでしょう。そういう考えがあるただけを覚えておくだけで今は十分でしょう」

「まあそうだな。それで話を戻すが魔力が生命力である以上生きている以上その力を持つていない者などは居ない、例外無くな。それこそ『魔力無し』とか関係なくな」

「えっでも…あれ？」

俺の言葉にカナリアが首を傾げる。

言い回しに引っかかりを感じと言う風に。

「そうだ、それだと確かに『魔力無し』と言うのはおかしい、魔力は確かに持っているのだからな」

そしてその感じたであろう引っ掛かりを正確に言葉として表してやる。

「だから『魔力無し』と言うのは正確な表現ではない。魔力を確かに持つていて、実際それも証明されている。正しく言い表すなら彼らは『魔力を引き出せない者』と表すべきだろうな」

「ええ、そしてその原因の一つが今のジルコニアの症状でもあるの

です」

肯定と共に続けられたエスアリアの言葉に外れかけた視線が再びこちらの元に戻ってくる。

目に見えるほどの驚きを見せながら。

「まあそう驚く事もないだろう。俺がソウだったのは最初から言っていた事なんだしょ」

そんな力ナリアの反応に苦笑交じりの笑みで応えてやる。

「魔力、生命力を魂から引き出す為にはその器たる命から汲み出さねばならないんだがな、それぞれが持つ属性が違っている場合それが上手くいかない事があるんだ」

「命と魂の属性…ですか？」

続ける説明に困惑の表情。

少し話を急ぎ過ぎたか？

「ええそうです…とは言いましても、そう滅多にある事ではないのですけどね。本来であれば魂の受け皿として命と言う器が作られ、それに合わせる様にして肉体もまた適応していくと言う感じで、自然と属性

は統一されるものなのですから。ですから普通なら分けて考えたりはしないものなのです。それはそれで当たり前の筈の事なのですからね」

付け加えられるエスアリアの言葉を聴いて、さらにカナリアの困惑は深まっていくか。

まあ当然と言えば当然だろうな。

ココまでの説明、『魔力無し』を完全否定するような話だ。

「まっなんにしたって例外は存在すると言うことだな」

「普通はそれぞれの属性など意識しないものですからね。それを考え、調査しようとするのは生命の根底を探ろうとする一部の錬金術師ぐらいのものでしょうか」

「まあそうだなー。あつそれで今回の俺の場合は後天的な例の一つだな。まあこんな事が可能だったなんて思いつきもなかったことだが」

そう、あまりに突拍子もない体験をしているのは今の自分は。

本来の形でない肉体と命に魂を入れられた現状。

しかも対極と言って良いほどに属性のかけ離れてるであろうツコにだ。

無茶苦茶にも程がある。

こんな状態で属性がそろわずなどあり得ない。

実際欠片も魔力を汲み取れはしなかったわけだし。

「ジルちゃん…どうなっちゃったんですか？」

「ちょっとした事故みたいなもんだ。まっ死に掛けたところを救われた結果としては安いところじゃねえか」

心配そうに見つめてくるカナリアにそう笑って見せてやる。

詳しいことは教える訳にはいかないだろうが、心配ない程度には軽く流せて見せてやる必要はあるだろう。

魔法使いを志す者からしてみれば魔力を失うと言う事情はずいぶん重い枷に感じられるであろうだから。

だから笑って見せてやる必要がある。

たいした事じゃない。

気にする必要もない。

と、そんな風に。

「まっ知識だけなら無駄にあるからな、実技は無理でも十分カナリアの先生にはなってやれるさ」

「…ハイよろしくおねがいします。ジルちゃん先生」

そんな俺の気持ちを感じ取ってくれたのか、カナリアもまた少しふざけた感じでの答えを返してくれた。

そんな風に気づいてくれられる子だ。

まだある若干のシコリも共にすごしている内すぐに解けるだろう。

まあ向かい合えてはいるんだ。

へたに急ぐ必要なんてない。

のんびりゆっくり、歩み寄るのはこれからでも十分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4074f/>

魔王と呼ばれていた少女（？）

2010年10月9日12時31分発行